

榎原廃寺の再検討(上)

久世 康博

はじめに

1997年、京都市西京区榎原内垣内町22・22-1において宅地造成が計画された。当該地は白鳳時代の創建になる寺院、「榎原廃寺」の寺域内に位置すると推定されている。工事に先立って試掘・発掘調査(第3次調査)を実施し、引き続いて第3次調査地の南側で国庫補助による発掘調査(第4次調査)を実施した。これらの発掘調査の概要については『京都市内遺跡発掘調査概報』⁽¹⁾として報告している。

しかし、その後の検討で認識不足や誤りが認められた。そして新知見も得ることが出来た。併せて1967年に実施した第1次調査の成果をも取り入れて、榎原廃寺の全体像についての論考を試みるものである。そこで前報告と従前の論考を洗い直すという観点から、“再検討”という形で報告するものである。



図1 調査位置と周辺の遺跡(1:25,000)

1 遺跡の位置と歴史的環境(図1)

檜原廃寺は、京都洛西にある長岡丘陵の東北端の台地上に位置している。三方が開けており、特に東側は、はるか京都の街を見下ろしている。現状の地形は西に西山丘陵の山塊の一部で、東へ向かっての傾斜が認められる。そして所々で急激な段差が点在しているために、活断層の「檜原断層」があるのではないかと考えられている。

檜原廃寺周辺の遺跡は『京都市遺跡地図』⁽²⁾によれば、当廃寺の東方1kmには弥生時代から古墳時代の遺構や遺物が出土する「下津林遺跡」がある。廃寺周辺の古墳としては、古墳時代前期の一本松塚・百々池古墳があり、なかでも全長83mの前方後円墳「史跡・天皇の杜古墳」は京都市内でも大型に属する。後期の古墳には塚ノ本・権現原・三重古墳などが散在しており、西山丘陵を越えた小畑川の左岸段丘では後期の古墳群として「福西古墳群」や「大枝山古墳群」などがある。

そして廃寺の南には当廃寺所用の瓦を焼いていたと思われる「檜原廃寺瓦窯跡(奈良前期)」が檜原廃寺史跡公園の南方丘陵斜面で窰2基、さらに公園の西側で3基以上の窰の存在が予想される堆積土を立会調査によって発見している(「檜原廃寺瓦西窯跡」)。同時代の集落としては、当廃寺の東方0.2kmの「檜原遺跡」で竪穴住居址が立会調査によって発見されている。

また檜原廃寺は古くからの道路と思われる山陰道と物集女街道が交差するところに建立されており、桂川右岸における京都盆地への交通の要衝であった。この寺を建立した氏族については論議のあるところだが、周辺が秦氏の勢力圏であったことや、近辺に秦氏の氏神と目される松尾大社や秦氏が造った「葛野の大堰」と思われる遺跡があったことから、同氏の建立説が有力である。

平安時代後期になると、いわゆる寄進地系荘園が全国各地に広まってきており、当地付近においても上桂荘、河島荘を始めとして、皇室・摂関家・寺社のもとに集中させて農業経営を行っていたことがよく知られている。

中世には阪急桂駅南方で革嶋氏の居館も建造されるようになった。

2 既往の調査(図2)

(a) 第1次調査(1967年) 市営住宅の建設に伴い発掘調査が実施された。この時に検出した遺構は八角形の瓦積基壇の塔跡を中心に、南側に基壇を持つ中門と、南面回廊及び東側・西側には築地が巡っていたことを確認した。

伽藍配置は遺構の検出状況と現状の地形から、中門・塔・金堂・講堂などが一直線上に並ぶ四天王寺式であったと考えられる。この時期の寺院は、山背一円に多く建てられているが、なかでも檜原廃寺は、遺存状況が極めて良好である。加えて八角の塔の形式をもつものは珍しく、全国的にも極めて価値の高い、貴重な寺跡であることから、1971年(昭和46)に国の史跡に指定され、現在は史跡公園として整備されている⁽³⁾。この調査の詳細については後述することとする。

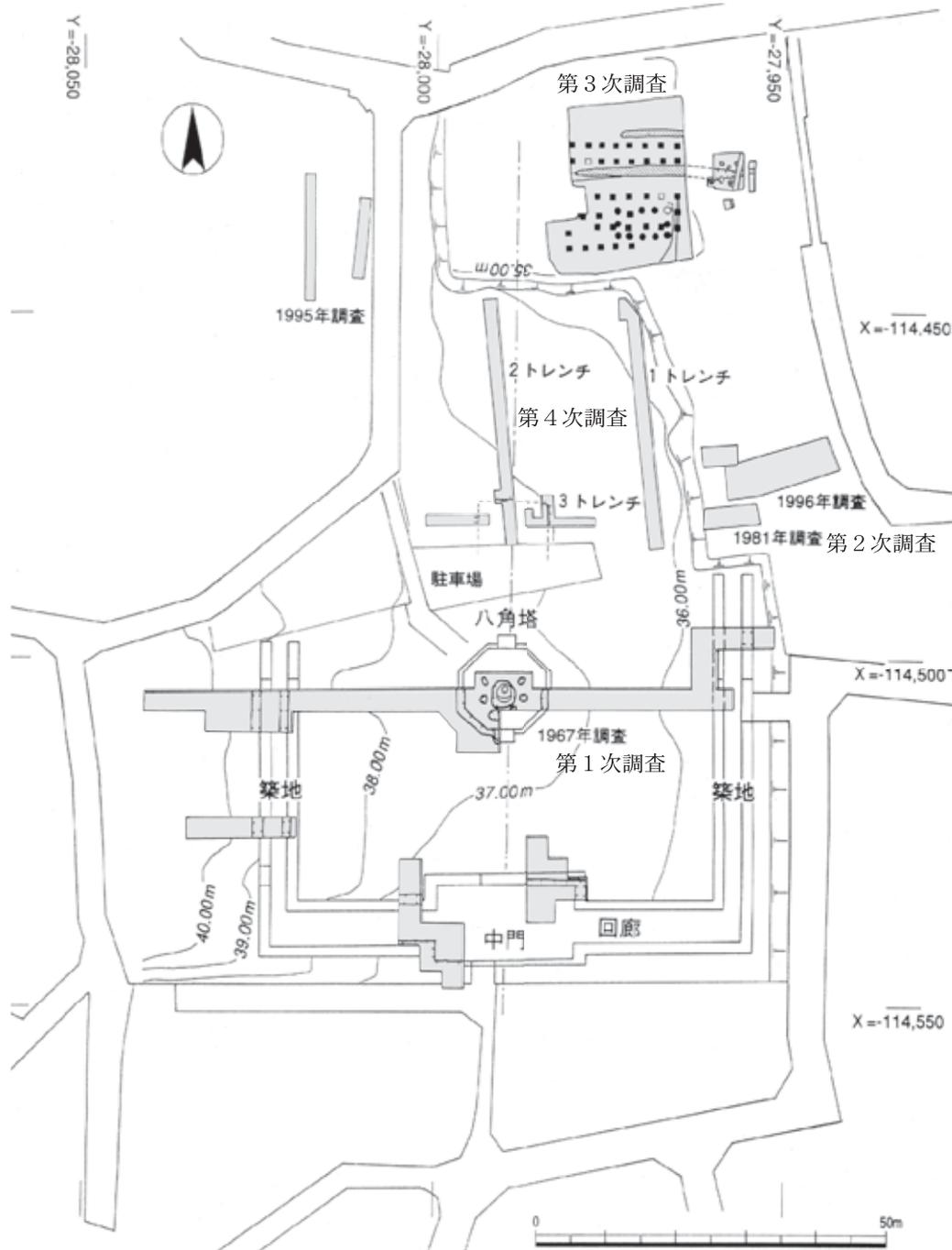


図2 調査区配置図

(b) 第2次調査(1981年) 東築地の北への延長部と推定される地点での調査である。調査トレンチは東西方向に2本設定した。調査の結果、柱穴、土坑、溝などを検出したが、すべて中世以後の遺構であることが判明した。檜原廃寺のものと見られる瓦片が多く出土しているが、中世以後の遺物に混じって出土している。これは、史跡公園の東築地部と現在畑となっている西側の部分と比べてかなり段差があるため、後世に削平を受けたものと考えられる⁽⁴⁾。

1996年にも、2つのトレンチの中間で、京都市埋蔵文化財センターにより、「檜原断層」の有無を目的とした調査を行っているが、同様の結論を得ている⁽⁵⁾。

(c) 立会調査(1987年) 公共下水道敷設工事に伴う立会調査である。調査範囲は広域にわたっており、寺院に関する遺構の検出が期待されたが、決定的な遺構の検出はなかったようである。しかし推定伽藍の西方の山裾で、当寺所用の瓦を焼いたと考えられる瓦窯を新たに発見している(榎原廃寺西瓦窯)。瓦窯本体の検出はなかったが、灰原を3基分確認しておりそれ以上あったものと思われる。この灰原から鬼瓦数点、平瓦多数が出土している⁽⁶⁾。1967年当時の調査報告で紹介されている、南方の瓦窯(榎原廃寺瓦窯)の存在と併せて当寺院所用の瓦が近辺で焼かれていたことが明かとなっている。調査結果に基づく旧地形と遺物包含層の分布については、次章で報告する。

(d) 試掘調査(1995年) 推定寺域の北方での遺構の在り方を探るための試掘である。南北方向の調査トレンチを2本設定して遺構の検出に努めたが、明確な遺構を検出することは出来なかった。この調査では埴輪片が出土しており、当地もまた榎原遺跡の一角であることが判明した⁽⁷⁾。

このほかにも小規模な立会調査を断続的に行っているが、何れも断片的な遺構・遺物の検出の報告に留まる。

3 遺物包含層の分布(図3)

立会調査の成果に基づいて、榎原廃寺周辺の旧地形と遺物包含層の分布状況の概略を述べる。一帯は丘陵裾から平坦地にかけて地形の変換部であることから、旧地形は谷状の落込みや、これに派生する溝によって複雑に起伏した状態であり、立会調査によって細部までの確に把握するのは困難である。しかし主要な土層の分布状況を把握することにより、このような立地条件でも比較的地盤の安定した丘陵の麓を造成して廃寺が成立していることが分かる。

遺物包含層は弥生時代から江戸時代に至る各時代の堆積を確認しており、周辺地域と比較すると遺跡の残存は良好な地域であることが判明した。以下、遺物包含層の分布状況について述べる。

弥生時代の遺物包含層は、物集女街道より西一筋目の地点で南北10m以上を確認した。表土下1.3~1.6m、厚さ約0.3mの灰色砂層で、弥生土器の小片が出土した。

古墳時代の包含層は、榎原遺跡東辺の位置で表土下0.5~0.8m、厚さ0.3mの黄褐色粘質土層で、この層の落込みから古墳時代中期の土師器高杯・壺・甕が出土した。

奈良時代後期の包含層は、榎原廃寺の東方約220mで確認した。表土下1.0~1.4m、厚さ0.2~0.3mの青灰色微砂層で、須恵器杯などを含み、東西20m以上に堆積していた。

平安時代前期の包含層は、榎原廃寺の北側と榎原遺跡の東部でみられた。榎原廃寺の北側では、暗褐色泥砂層が表土下0.6~1.4m、厚さ0.3~0.7mで、南北20m以上に堆積しており、さらに北側では同時期の灰色泥砂層を確認した。榎原遺跡の東部では、向日市と境界線になっている水路の北側で灰色砂礫層と灰褐色粘質土層を確認した。この包含層は深さ1.0m以上の流路あるいは湿地と考えられる大きな落込みの底部付近に、厚さ0.2m前後で相互に薄く堆積しており、東西60m以

上を確認した。この包含層の北東側では、平安時代前期と後期の遺物が混在して出土する暗褐色粘質土層が表土下0.1～0.7mで南北50mにわたり堆積していた。

また、平安時代前期から中期の包含層を櫻原廃寺の東方200～240mの位置で確認した。落差0.8～1.7mの大きな落込みの肩部および裾部に堆積していた暗褐色泥砂層と暗灰黄色粘質土層である。この大きな落込みは櫻原廃寺の南方30～110mで確認した谷筋の延長部分である可能性が高い。

注目されるのは、平安時代中期の包含層で、物集女街道沿いの西側で広範囲にわたり確認した灰色泥砂層である。表土下0.1～0.7m、厚さ0.1～0.5mで、場所によっては現道路敷のほぼ直下で確認でき、その上面で比較的多数の溝・土坑・ピットを検出した。この包含層に奈良時代後期から平安時代前期の遺物が一定量含まれていたことから、この付近一帯は櫻原廃寺に付属する集落域であったと想定され、平安時代中期に生活面を改めて整地し直した状況が窺える。

平安時代後期の包含層は、上記整地層のさらに西側で確認した暗褐色粘質土層で、表土下0.2～0.7mに堆積する厚さ0.3～0.5mの整地層である。この層の上面で溝3条を検出した。

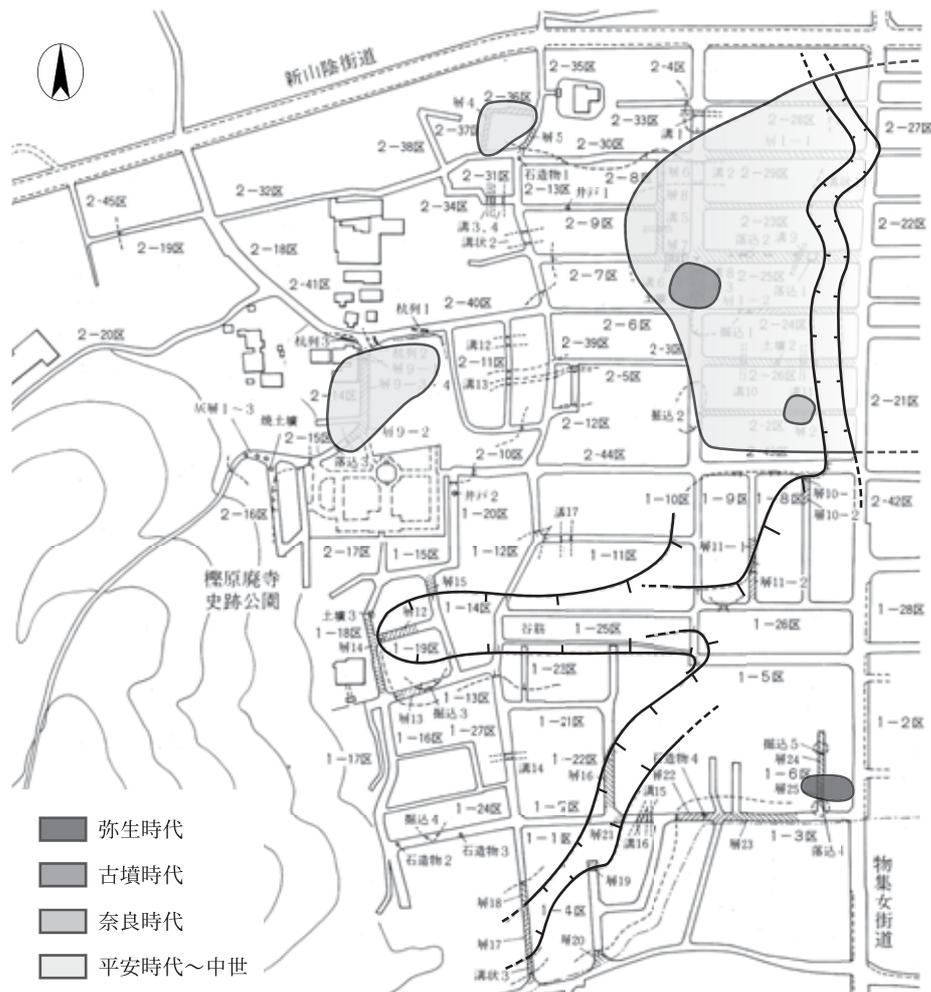


図3 包含層分布図 註6文献を改編（1：5,000）

前述した谷筋の肩部および斜面部では平安時代後期から鎌倉・室町・江戸時代に至る遺物が混在して出土した。(註6文献より抜粋)

4 第3・第4次調査の経過と基本土層

調査の経過 宅地造成工事に先立っての試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施した。調査の結果、敷地の中央部約1/3は良好な形で遺構が残存していることが判明した。この遺構群は檜原廃寺に関連すると思われるため、発掘調査を実施して精査する運びとなった(第3次調査)。この調査では、敷地の東および西それぞれ1/3ずつは現代攪乱や後世の削平のために、遺構の検出は望めないという試掘調査の結果を受けて、まず中央に調査区(1区、420㎡)を設定した。

しかし調査の進展状況から、後に調査区を拡張する必要性が生じてきたため、京都市埋蔵文化財調査センターの指導により新たに調査区(2~6区、計40㎡)を設定することになった。

遺構の密度は調査区の北半部は比較的少なく、南半部では多くの柱穴が検出された。出土する遺物や遺構の切り合い関係から、奈良時代末から平安時代の初期の溝、柱穴、土坑などが数多くあり、檜原廃寺に関連する遺構群の存在を確認した。

この調査結果を受けて、さらに当廃寺の伽藍の配置を明らかにすることとなり、第3次調査地と第1次調査地の中間にある畑地を調査することとなった(第4次調査)。その目的とするところは、金堂や講堂の残存状況を把握することにあつた。そこで、これらの問題点について追及し、明らかにするために第4次調査を行なったものである。調査地の現況は畑作地で、東西約40m、南北約40mである。調査にあたって、まず機械力によって幅1.2~2.2m、長さ34~36m、深さ約0.7mの南北トレンチを、約20mの間隔を置いて2本設定した。そして東側を第1トレンチ、西側を第2トレンチと名付けた。以後は手掘りによって遺構の検出に努めた。これは先に述べた目的に沿ったもので、第1トレンチでは金堂や講堂に取り付いたり、囲む回廊を探るために調査区の東半に設定した。第2トレンチでは金堂・講堂を確認することを目的として、ほぼ中軸線(推定)に沿って設定した。そして遺構の検出状況に応じて拡張することとした。調査の結果、檜原廃寺に伴うかと思われる遺構や廃絶後の土地利用や地形の変化の一端が明かとなった。

発掘調査は1997年6月23日~同年8月9日に実施した調査を第3次調査、1997年8月14日~同年9月12日に実施した調査を第4次調査として行った。

基本土層 第3次調査地の基本土層は現代盛土 - にぶい黄褐色泥砂層(一部に灰色砂層) - 黄褐色砂泥層で、黄褐色砂泥層は本遺跡の遺構面である。1区で確認した遺構面は水平に近かったが、後に拡張した調査区(2~6区)とは約0.8mの高低差を示していた。

第4次調査地の基本土層は、現耕作土から平均約70cmで黄褐色砂泥層の無遺物層となっている。基本的にはこの土層が遺構面となっており、あまり複雑な様相は呈していない。

第3次 - 第4次調査地の現地表面のレベル差は、約1.0mを測る。そして、遺構面のレベルは、第3次調査区34.8m、第4次調査区35.1mと約0.3mの高低差におさまっている。（図13）

5 遺構

第1次調査の遺構については、既往の調査の項目で取り扱うべきかと思われる。しかし後述する論考で、第3・4次調査分と併せたほうがより理解が得られやすいのではないかと思い、敢えて併載することとした。

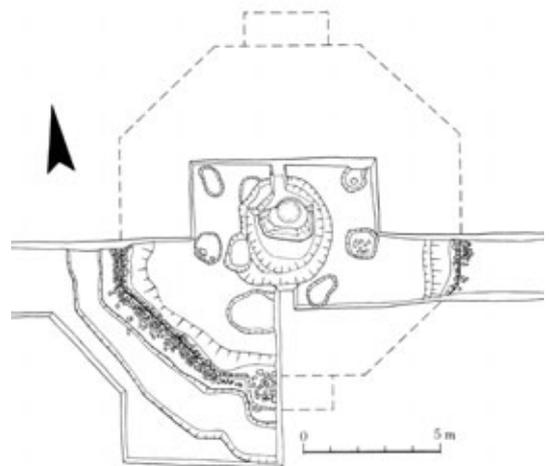
第1次調査

塔跡（図4） 報文によれば、この調査以前から高まりがあったようである。そして調査の結果、八角形の瓦積基壇（一辺5.07m、対辺の距離12.27m、現在の高さ1.17m）をもつ建物であることが判明し、心礎の検出によって塔であることを確認した。

基壇は、平瓦を縦に半裁したものを整地面に直接に平積にするもので、延石などの施設はない。保存の最もよい箇所では11段（高さ60cm）ある。また部分的に丸瓦も用いて積みなおした部分がみられるが、この補修はとくに南面でいちじるしい。階段は発掘調査範囲内では南面にのみあり、最下段一段が残っていた。

基壇上面は後世に削平を受け、礎石は遺存しなかった。しかし、礎石据え付け位置を示すと思われる痕跡から、建物規模は側通柱間約2.2m、四天柱間約2.2mであったと推定できる。

基壇中央部の現在の上面から2.05m下に花崗岩の心礎（東西径1.98m、厚さ1.05m）を検出した。いわゆる地下式心礎であって、基壇の築成状況より、基壇の築成にさきだって据え付けたものであることがわかった。心礎はほぼ方形をなし、各辺をあ



塔発掘図



塔基壇（南より）



塔心礎

図4 第1次調査塔跡実測図・写真
『埋蔵文化財発掘調査概報』1967 京都府教育委員会

らく面取りしている。中央には心柱を受ける円形の凹み（直径84cm、深さ9cm）がある。

心礎上面には、心柱をたてたのちに柱の根元の周囲に半焼けの瓦をくぐり込んで多量にまぜた粘土（厚さ30cm、幅85cm）がめぐっていた。この「根巻き」の粘土は心礎の南側は後世の攪乱によって破壊されていたが、北半部ではよく残っていたので、これを保存するため、この部分の心礎上面の調査はおこなわなかった。なお、舍利孔は上面、南・東・西の側面にはなかった。

塔跡の基壇中央には、今の地表から約2mの地下に心柱の礎石が据えられており、円形の柱型を彫りくぼめたこの心礎の形式と、出土する軒丸瓦や、瓦をつかって基壇を積む手法から考えて、7世紀中葉に造られた寺であったと推定できる。

中門 東西20m、南北11mの規模を測る中門と考えられる遺構を確認した。道路崖面の版築状盛土層の追求の結果、中門とみられる建物の基壇痕跡を検出した。基壇規模は東西長約20m、南北長約11mあり、基壇基底部30cmほどの高さの築成土が残存する程度である。この基壇の付近には瓦はほとんど残っておらず、果して瓦積基壇であったかどうか不明である。塔中心より基壇中心まで約34mある。この基壇の西には幅5mの築成土壇がとりついていて西にのびている。

回廊 幅5mの南面回廊が中門に取り付いていたことを確認した。雨落溝（幅1.2m、深さ0.4m）をみいだした。これは南面回廊およびそれに付属する雨落溝であろう。なお、基壇東側については道路であるため調査はできなかった。

築地 塔基壇の西方の2箇所のトレンチで南北に走る築地（幅2.4m）の痕跡を確認した。塔の中心と築地心との距離は31.85mである。築地は、壇状築成層としてのこっているにすぎないが、その東西には雨落溝（東溝幅1.4m、西溝幅1.6m、両溝とも深さ0.3m）があり、西溝には瓦と礫が堆積していた。塔基壇の東方は削平がいちじるしく、東築地の痕跡は西側のそれほど明瞭でなかったが、一応築地東側雨落溝と推定される南北溝（幅1.5m、深さ0.3m）の存在をみとめた。築地西側雨落溝は後世の南北溝によってこわされていた。この溝の西に接して凝灰岩板石（63cm×35cm×10cm）2枚がならんでいたが、調査以前に掘り出された凝灰岩切石とともにその性格はわからない。（註3文献より抜粋）

第3次調査（図12・13・14、写真2～11）

検出した主な遺構は、東西溝3条、南北溝2条、コ字形溝1条、柱穴・土坑多数などである。柱穴は調査区南半で多く検出している。これらの柱穴を組み合わせ、堀として復元できたもの2条、掘立柱建物として復元できたのは5棟分ある。この調査区内で特徴的な点は、柱穴の深さは全体的に西へ行くにつれて浅くなっている。これは旧地形が西で高くなっており、その面上に遺構を掘り込んでいた。しかし後世に削平を受けて、平坦地化されたために、結果的に遺構の掘り底が浅くなったのであろう。

SD48（図20）…調査区の北半で検出した東西方向の溝である。確認した規模は、幅1.2～1.8m、最深は0.4m、検出長は26.2mを測る。溝の深度は東から西に向かって徐々に浅くなってきており、調査区の西端部まで残存しているが、ほとんど消滅しかけている。出土した遺物は瓦片が主で、

土器も多量ある。遺物の出土状況から、屋根から落ちたいわゆる「瓦落ち」の状況ではなく、投棄された様子であった。この溝は遺物包含層を切って検出している。埋土を観察してみると、大きく3時期の堆積が認められ、出土する遺物は最上層に集中している。出土遺物から、この溝は8世紀末から9世紀初頭に埋まったと考えている。

SD49(図19・20) ...SD48の北側約5mで検出する東西方向の溝である。確認した規模は、幅1.0m、最深は0.2m、検出長は9.0mを測る。SD48と同様に深度は東から西に向かって徐々に浅くなってきており、西端部では消滅している。出土した遺物は瓦片が主で、土器が少量ある。埋土は2層認められたが、遺物の出土量・時期ともに大きな変化はない。8世紀末から9世紀初頭に埋まったようである。

SD66(図16) ...調査区の東半部で検出しており、コの字形を呈している。確認した規模は、幅0.7~1.0m、最深は0.4m、一辺の長さは10m強を測る。遺構の底は東から西に向かって徐々に浅くなってきており、北側のコーナー部からは約1m、南側のコーナーから約2.5mで消滅している。出土した遺物は瓦片が主で、土器が少量ある。埋土は褐灰色・褐色砂泥が底に滞留した後、灰黄褐色砂泥が一気に埋まったものと見られる。8世紀末から9世紀初頭には埋没したと思われる。

SD160(図19) ...SD48とSD49の中間で検出する東西方向の溝である。確認した規模は、幅0.93m、最深は0.17m、検出長は6.0mを測り、SD49より若干短い。SD49と同様の形態である。この溝は包含層を除去した段階で検出している。図面上では、2区の北端でも延長の一部が検出されるかと思うが、削平を受けたためか遺構の検出はなかった。埋土は一部切合いが認められるが、基本的に単層である。8世紀末から9世紀初頭には埋没したと思われる。

SD201(図14) ...2区では幅0.9m、深さ0.14mの南北溝を調査区南端から2.6m確認しており、さらに4・6区でも、その延長と考えられる溝状の落ち込みを検出している。合計50m以上を確認することが出来た。この溝はSD48の下層で検出されているが、遺物の出土はなかった。2区ではこの溝の東側でも溝状の落ち込みを確認している。遺物の出土がないため、埋没した時期は不明である。

SD202(図14) ...2・4区で検出する南北方向の溝である。溝は幅0.9~1.0m、深さ0.15mを測り、埋土から中世の遺物が少量出土する。

SA1(図19) ...SD49とSD160の間で検出している。東西方向で7間(15m)分を確認した。柱間は2.0~3.8m。柱穴の掘形は0.5~0.7mの隅丸方形で、Pit57,61,73は遺物包含層除去後に検出した。検出面からの深さは0.3~0.4mである。柱あたりの痕跡から柱径は0.3~0.4mと推定される。遺物の出土がないため、時期は不明である。

SA2(図21) ...SD48とSD160の間で検出。東西方向で9基11間(23.6m)分を、遺物包含層の上面で確認した。柱間は2.1~2.4mである。柱穴の掘形は0.55~0.7mの隅丸方形で、深さは0.3~0.45mである。何れも柱根は無くなっていたが、柱あたりの痕跡から柱径は0.2~0.3mであると推定される。この柱列の続きは2区でも検出している。検出された9基の柱穴のうち、4基には柱を抜いた後に石や瓦を据え置いて地鎮としている。SA1とはほぼ平行して検出されており、当初

はSA1と対応する遺構と考えていた。しかし、柱穴の位置が微妙にずれていることや、南列にのみ地鎮の痕跡が認められるという不自然な様相から、別の遺構であると判断した。柱穴から10世紀代の土器が出土する。

SB1 (図15) ...調査区中央付近にある東西4間(9.0m)、南北2間(4.5m)の東西方向の建物である。北半部は大攪乱のため、遺構の残存状況はよくない。柱穴の掘形は一边が0.7~0.9mの隅丸方形で、深さは0.3~0.4mである。掘形の規模はSB2より若干小ぶりである。柱あたりの痕跡から柱径は20cm前後であると推定できる。東側の柱列はSD66を切っている。柱穴から9世紀後葉の土器が出土している。

この建物に付随して、北西隅柱(Pit144)の西方約2mで一边0.8mを測る隅丸方形の柱穴状遺構(Pit161)を検出している。この遺構も僅か0.05mしか残っていなかったが、礫・瓦が充填された状態で検出されている。しかし、柱穴の痕跡は認められなかった。

SB2 (図16) ...調査区中央付近にある東西6間(13.8m)、南北2間(4.6m)の東西方向の建物である。柱穴の掘形は一边が0.7~0.95mの隅丸方形で、深さは0.3~0.5mである。柱あたりの痕跡から柱径は0.25~0.35mである。この建物は2間ごとに間仕切りを持っており、2×2間のブロックを形成する。調査区の西端付近で、南側柱列の延長と見られる土坑状遺構を検出するが、柱穴として認識することが出来なかった。遺構の重複関係からSB1より古い。柱穴から8世紀末から9世紀初頭の土器が出土している。

この建物では、西側のブロックの南東隅柱(Pit24)に接して、軒瓦を積み重ねた状態で埋納遺構Pit26を検出している。その西隣の柱穴(Pit186)には、抜き取った後に石を詰めた様子が認められた。また建物の東側では、SD66がコの字形に取り囲んでいることが判明した。

SB3 (図17) ...調査区中央付近にある東西4間(7.1m)、南北2間(3.8m)の東西方向の建物である。柱穴は一边が0.5~0.65mの隅丸方形で、深さは0.23~0.4mである。掘形の規模はSB1・2より若干小ぶりである。柱あたりの痕跡から柱径は0.25m前後である。遺物の出土がないため時期不明である。

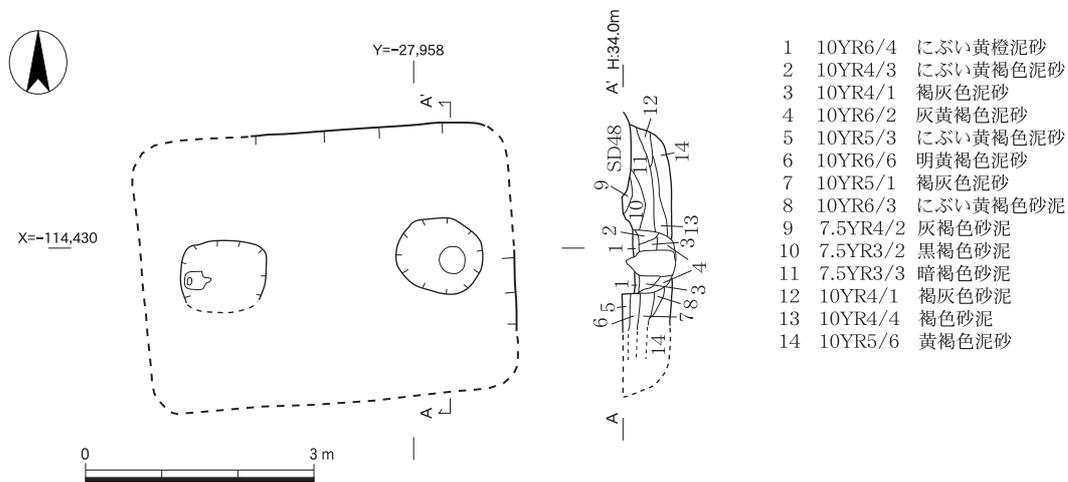


図5 SX201実測図

SB4（図17）...調査区北半部にある東西3間（7.1m）、南北2間（4.4m）の東西方向の建物である。SB2の約5m北側に位置する。柱穴は一辺が0.35～0.5mの隅丸方形で、深さは0.2～0.4mである。いわゆる総柱の建物で、倉庫ではないかと考えられる。柱あたりの痕跡から柱径は0.15～0.2mである。柱穴から11世紀後葉～12世紀前葉の土器が出土している。

SB5（図17）...調査区北端部にある東西3間（7.8m）、南北2間（4.2m）以上の建物である。SB4の約2m北側に有る。柱穴は直径0.3～0.35mの円形で、深さは0.2～0.3mである。身舎の南に廂が取りつく。北端については調査区外のため不明である。何れも柱は無くなっていたが、柱あたりの痕跡から柱径は0.15m前後である。遺物の出土がないため時期不明である。

SX201（図5）...2区のSD48・SA2の直近南で検出する。2・4・6区で検出している南北溝の下層で検出された。掘形の形状は、東西約4.8m、南北約3.6mに復元できる隅丸長方形である。埋土は暗褐色砂泥層、黄褐色砂泥層を主体としており、特につき固めたような様子は認められない。この遺構の中に、さらに掘立柱の柱穴を検出する。その規模は径1.1～1.2m、深さ0.7mを測り、西側は倒れていたが柱根（径0.35m）が残存していた。残存する柱根の周囲には、瓦片・石で覆われていた様子が認められた。また柱を立て替えた様子は認められなかった。柱根を覆うようにして出土した瓦片は何れも白鳳時代のものであったが、時期を決定するまでには至らなかった。

Pit26（図6）...SB2の南側柱列の中央の柱掘形の直近で検出する。規模は径0.4m以上、深さ0.15mを測る小土坑である。遺物の埋納状況は底部に軒丸瓦、軒平瓦を据え置き、更にその上に軒丸瓦を上向きに重ね置いていた。出土した遺物は軒丸瓦、軒平瓦および平瓦で、何れも白鳳時代の瓦である。しかし平安時代初頭の建物に伴う遺構であることは明らかであるため、この時期の遺構と考えて差しつかえないと思われる。

Pit161（図15）...SB1の北側の柱筋で北西の柱から約2.4m離れて検出する。遺構の規模は一辺0.75～0.85mの隅丸方形で、残存する深さは0.05mと浅い。これは現代攪乱によって削平を受けた結果、かろうじて残っていたものである。この遺構は柱穴状であるが、瓦や礫が詰まっており、しかも断面土層の観察の結果、柱根の痕跡は認められなかったため、ほかの目的で穿ったものと解釈できる。

SX1...試掘調査で湿地と判定した大土坑である。調査区の東端で確認しており、検出したのは一部であるが、東西2.0m以上、南北8.5m以上を測る。埋土は大きく3層に分けられ、11世紀中頃から11世紀後半には埋まったものと見られる。この遺構から土師器・須恵器・瓦など多くの遺物が出土し

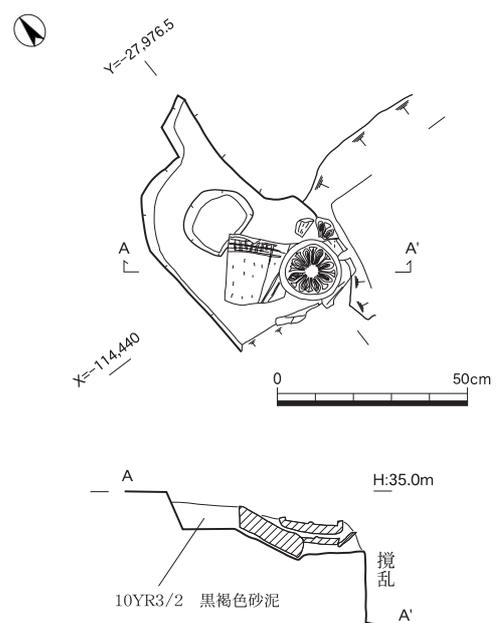


図6 Pit26実測図

ている。

SK83...調査区の北端で確認する。規模は直径0.7～0.8m、深さ0.15mを測る。位置的にはSB5の中であるが、その関係については確証はない。埋土の中には炭を含む。土器の出土は少なかった。8世紀から9世紀にかけての土器が少量出土する。

SK102...調査区の南端で確認する。検出時の大きさは径1.1m、深さ0.25mを測る。埋土は焼土を含む。この遺構から10世紀代の土師器皿が出土している。

第4次調査(図12、写真12～20)

第4次調査はトレンチによる調査を主としている。この調査で検出した主な遺構は、基壇状遺構、井戸、土坑、溝・流路などがある。第3次調査に比べて、検出した遺構の密度はかなり低いといえる。

SB205(図18)...第2トレンチの南端で確認する基壇状遺構である。のちに、さらに東西幅を明らかにするために第3・4トレンチを設定した。

この遺構は非常に固く締まった土層をベースとして、南端から約6.2mで長軸0.2～0.3m、短軸0.1～0.15mの川原石を東西方向に並べた石列が1条、さらにその北1mで幅0.6m、深さ0.1mを測る東西溝(SD222)を検出した。

第3・4トレンチでも、やはり基壇が落ち込む様子が認められた。しかし後世に削り取られたためか、第2トレンチで検出したような瓦の堆積や石列は確認できなかった。ただ、第3トレンチで基壇の東端と思われる辺りで、残存状況は悪いが幅1.0m、深さ0.05mの南北溝(SD301)を検出しており、これを東辺の溝と推定した。西の第4トレンチでは、西肩は中世の溝により消失していたが、整地土・地山が階段状になっているのを確認しており西辺(SX401)を推定することができた。このトレンチでは南北方向の石列の抜取跡が確認できた。

基壇の東西の幅はSD301～SX401の心々間距離は14.1mと推定でき、南北は8m以上を確認した。構造については、断ち割りなどを行っていないため明確には断定出来ない。しかし後世の攪乱坑による断面観察では、砂泥や砂のブロックを(突き)固めてはいたようであったが、あまり丁寧な造作ではなかった。

出土した遺物は、SB205の石列からSD222間の上面で集中して出土しており、第3・4トレンチではこうした堆積は認められなかった。検出した瓦を観察すると、ほとんどが白鳳時代の平瓦で丸瓦が少量あった。奈良時代から平安時代初期の瓦も少量であるが混入していた。

SX108...第1トレンチで南端から約6m程確認している。この部分のベースとなる褐色砂泥層は、南西から北東にかけての急激な傾斜を示しており、そこへ黄褐色砂泥層などの土砂を入れたものであり、約0.3～0.7mの厚さで大体35.6mの水準を確認している。

これらの土層と地山との境辺りから須恵器杯B蓋の一部が出土している。小片であるため時期の特定は困難であるが、調整などの特徴から少なくとも奈良以前のものである。

SE101...第1トレンチの中央部で検出した。掘形の形状は隅丸方形で、検出時は素掘の状態

ある。検出面での規模は東西1.0m以上・南北1.7m、深さは検出面から1.15mであった。埋土から土師器皿が出土している。この井戸は遺物から、16世紀前後に埋まったものと考えられる。

SE109...SE101のすぐ北で検出した。掘形の形状は隅丸方形で、検出時は素掘の状態である。検出面での規模は東西1.2m以上・南北1.45m、深さは検出面から0.9m以上であった。埋土から土師器皿、甕小片が出土しているが、埋まった時期は不明である。この井戸は湧水が激しく、掘下げは途中で断念した。

SE112...SE109の北側で検出した。前2者と同様に掘形の形状は隅丸方形で、検出時は素掘の状態である。検出面での規模は東西1.0m・南北1.7m、深さは検出面から1.15mであった。埋土から焼締陶器播鉢、瓦器椀、土師器甕、須恵器甕などが出土している。この井戸では遺物から、17世紀中葉から後葉に埋まったものと考えられる。

SK104...第1トレンチ南よりで検出した土坑である。掘形は円形で直径は1.1mを測る。この土坑は形状から井戸ではないかと思われる。出土遺物がないため、埋没時期は不明である。なお、この遺構では、検出面から1.05mの深さで、長軸20cm・短軸10cmの扁平な石が据えたような状態で検出されている。

SK211...第2トレンチ中央で検出した瓦溜遺構である。径2.6mを測る。多量の瓦とともに中世の土器が出土する。

SK220（図7）...SB205の北へ約20mに位置する、一辺0.8mの隅丸方形土坑である。深さは0.1mと遺存状況は悪い。土坑内より軒丸瓦、平瓦が多く出土しており、9世紀から10世紀の土器も少量出土する。

SD110（写真16）...第1トレンチの北端部付近で検出する東西方向の溝である。確認した規模は幅1.4m、深さ0.4mで、若干左回りに振れている。埋土は暗褐色系の砂泥で、出土遺物が無かったため、時期は不明確である。

SD212・216・217...第2トレンチの中央部で、3条相接近して検出している。何れも南西から北東方向に向かっての流れを示している。堆積土と調査地が山塊に接しているところからも、かなり急激な流れがあったものと理解している。全体としては一つの流路と見做すことができる。幅6.5m、深さ0.8mを測り、南西から北東にかけての流れの方向を示している。大きく4時期の流れを断面の観察から判断できる。流れの勢いはかなり急であったようで、埋土は拳大の礫を主体としており、底部は凹凸が激しくなっていた。出土する遺物はほとんどが瓦類であったが、室町

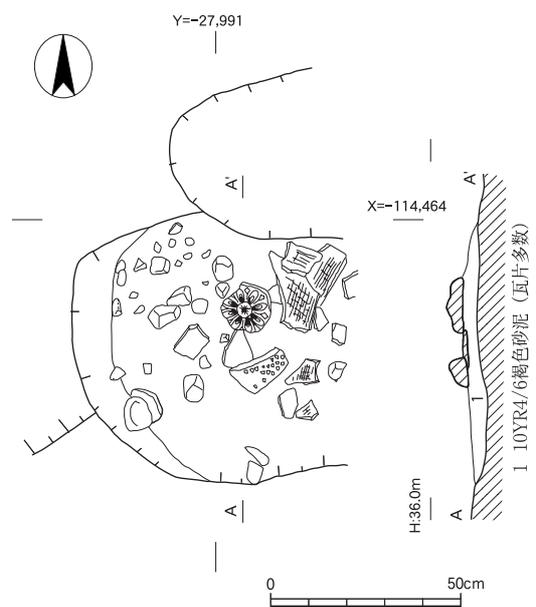


図7 SK220実測図

時代の瓦器椀・羽釜などの破片が少量出土している。

6 遺構の評価と時期区分

遺構の切合い関係、出土遺物の検討から、0～、期の5時期に区分することが可能である。

0期（「廃寺」以前）

弥生土器片や埴輪片などの遺物の散布が認められ、先に紹介したような古墳が近辺に点在している。だが、本調査区内では当該期の遺構に伴うものはない。

。期（「廃寺」成立期）

第1次調査分については、報告された所見に基づいて時期決定をしている。この時期の遺構は、検出した塔・（中門・南回廊）がある。第3次調査の遺構では、SX201は遺構検出の層位関係からこの時期に該当すると考えている。第4次調査の遺構では、SB205・SX108を確認している。検出遺構から当該期の遺物の出土は瓦以外は認められなかったものの、奈良時代から平安時代前期の遺構の下層で検出されていることが明らかであるため、白鳳期のものと推定している。同様にSA1も、遺物の出土がなかったものの、この時期の北限築地と考えている。

中門・南回廊については、詳細がよく分からないために保留とし、とくに所属時期は定めませんが、復元図では各時期に当てはめてみることにする。

八角塔...我が国では初例であるため、断定するには若干の躊躇があるが、棟先の部分では専用の瓦が製作されていた可能性がある。しかし八角塔の事例が多い高句麗でも、そのような瓦の報告が為されていないところから、疑問が介在する余地はある。後世の八角形の建物の屋根には、既製品を加工して葺いているものが多い。当遺跡の場合、コーナー部の瓦は製作当初から意識して作られていたのであろうか。出土した瓦については次号で報告の予定である。

建物基壇...第4次調査のSB205である。今回の調査で知ることができた

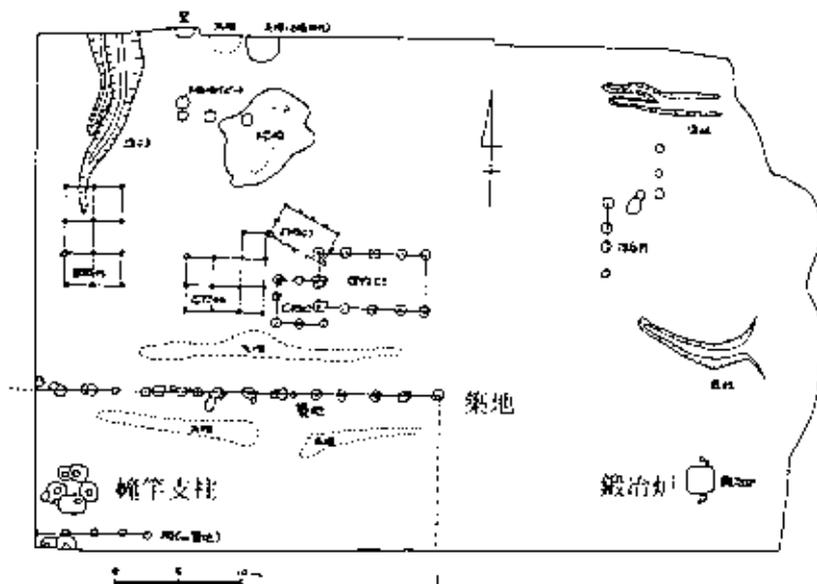


図8 信太寺遺構配置図（註9より）1：800

所見を幾つか記しておくこととする。地業については掘り込みは無かったようである。残存する土壇は固く締っていたが、いわゆる版築工法ではなく土塊を入れて固めただけのものである。この遺構には八角塔基壇のように瓦積による基壇化粧は認められなかった。検出した基壇の規模も小さく、出土する瓦の量も寺院遺構にしては少量であると言える。遺構の振れについて検証すると、雨落ち溝と考えられるSD222は正東西方向に近く、石列は反時計回りに若干振れがあることが確かめられている。その数値は、創建当初のものと、補修時のものに属しており、傍証ではあるがこの建物も平安初期に補修・改築されたかと思われる。

幢竿支柱...SX201をどのような性格の遺構として捉えるべきであろうか。回廊の一部、鳥居⁽⁸⁾などが考えられた。回廊と考えたとき、位置的には東築地の延長部であり築地の下層遺構とも考えられたが、この遺構のみに柱根が残っていたことで疑問が生じる。また鳥居としても伽藍の背後にあることは考えづらい。また幢竿支柱と考えたとき、現存する幢竿支柱や韓国・北朝鮮所在の寺院の例を鑑みても、主要伽藍の前面に位置しているのが通例である。それが設置された位置は、中門・南大門にほど近いところに設置されているのがほとんどである。伽藍後方での検出例は和泉国信太寺のみである（図8）⁽⁹⁾。とすれば類例主義から見れば幢竿支柱とは言い難いのではないかと考えられる。しかし、この種の遺構は旗竿を直立支持するための施設であり⁽¹⁰⁾、周囲から認識される必要がある。以前に述べたように、廃寺の北側に山陰街道が通じていると想定されており、この道路を往環する人々に見えるように、敢えて北側に設置したと見なせるのではないかとと思われる。

寺域外郭施設（図19）...SD49・160、SA1で構成される築地遺構がそうではないかと思われる。寺域北限の遺構群と思われる。この一連の遺構群で、SA1は時期を特定できないがSD160とともに最も古い遺構である。SD49に関しては疑念が無いわけではないが、本来在ったものとして解釈して、この時期に成立して再興直前に作り替えがあったと考えてみたい。いわば傍証によって推定するところである。出土する土器は8世紀から9世紀初頭の様相を示しているが、この遺構群の中では最も古い時期であろう。

整地層...SX108は、トレンチ調査のために確定は出来ないが、ベースとなる黄褐色砂泥層が急激に落ち込んでおり、谷状の落込みであったかと思われる。これを埋め立てて寺域の一部としたのではないかとと思われる。

「期（「廃寺」再興期）

「期は再興期の遺構群と考えられる。奈良時代末期から平安時代初頭を中心とする遺構群である。検出する遺構の数量としては、この時期のものがもっとも多い。この時期の主な遺構には北・東西築地、掘立柱建物、土坑などがある。八角塔から出土する瓦もこの時期のものが多くところから、修理されたのではないかとの見解を第1次調査の報文で示している。

寺域外郭施設

北築地（図20）...SD48・49で構成される。。期築地の心々距離に比べて規模が拡大されており、

第1次調査で報告する南面回廊と同程度の規模(5.0m)である。この溝の間で検出されるSD160とは層位関係から同じ時期ではあり得ない。出土する瓦・土器を検討しても、八角瓦がそれぞれの溝から出土していることや土器からもSD48・49が同時期に併存していたと考えられる。そのため両者は同じ性格の、北側の寺域を限る施設としての築地ではないかと思われる。

東(西)築地...第3次調査の第2調査区で南北溝を検出している。SD201は第1次調査で検出する西側溝延長部に当たる。これにより東築地は途中で大幅な削平によって消滅しているものの、調査区設定の関係上、東側溝は確認できていないが、都合50m以上分の存在を確認することが出来た。柱穴の検出はなかった。その振れはほぼ真南北を示している。この遺構は幢竿支柱の掘形を切る形で検出されており、遺物の出土はないが「期」の遺構と推定することが出来る。これによって「期」における北・東・西の寺域を確定することが出来る。

建物基壇...SX205の基壇周溝はほぼ正東西を示している。これに対して石列は若干南へ振れている。この両者の前後関係については明らかにすることは出来なかったが、東築地遺構の振れを考慮に入れると基壇周溝が「期」の遺構で、基壇の修築・改作に伴うものとすれば、何らかの改作の手が加えられた結果と推定できる。

掘立柱建物...SB2の建物の東半部には、SD66が建物を囲むようにしてコの字形で検出されているが、本来はこの建物を巡っていたのであろう。検出したかぎりでは2×6間の建物を想定しているが、もう少し西へ延びていたかもしれないとも考えられる。調査区が限られていたことと、遺構の残存状況から検出が期待できないが、一応2棟分建てることが出来たものと想定しておく。この建物には立ち上げるときと、廃棄するとき祭祀を行った痕跡を検出している。SB2は寺域全体の位置関係と建物の構造から、小子坊または僧房と考えてよいであろう。

その他

埋納遺構...Pit26(第3次調査)とSK220(第4次調査)は、瓦を埋置するいわゆる埋納遺構と考えられる。Pit26はSB2の建築に伴うもので、瓦の検出状況から埋納遺構と考えて差し支えない。この種の遺構で瓦を主として埋納する例は少ないと言え、京都府木津町・上人ヶ平遺跡でも報告されている⁽¹¹⁾程度である。その目的とするところは、家屋を立ち上げる際に行う宅鎮祭祀である。

SK220は、塔・基壇建物のセンター付近を通過する位置関係にあるが、その目的や性格については今の段階では断定できない。

「期」(「廃寺」終焉期)

平安時代中期を中心とする時期の遺構群である。この時期の遺構としては、焼土・炭が混入する土坑の検出が目される。

寺域外郭施設(図9)...SA2は北限を画する堀跡である。「期」までは築地によって寺域を形成していたが、それを作る財力・意志がなくなっていたのであろうか。東西に関しては築地が機能していたのか堀が作られていたのか不明である。

掘立柱建物...SB1は寺域全体の位置関係から、小子坊（僧房）と考えてよいであろう。北側の柱筋で北西の柱から約2.4m離れて、柱穴を持たないピット（Pit161）を検出している。この時期に東西の築地が「Ⅰ期」に引き続いて機能していたとするなら、3～4棟分建てる余地がある。

土坑...SK83・SK102の埋土に焼土や灰が混入していることが確認されている。そのため当廃寺で火災が発生し、その後処理のために土坑が穿たれたのではないかと解釈している。

、期（「廃寺」以降～中近世）

検出する遺構は平安後期以降であり、調査結果から「廃寺」が廃絶した以後の遺構であるとの

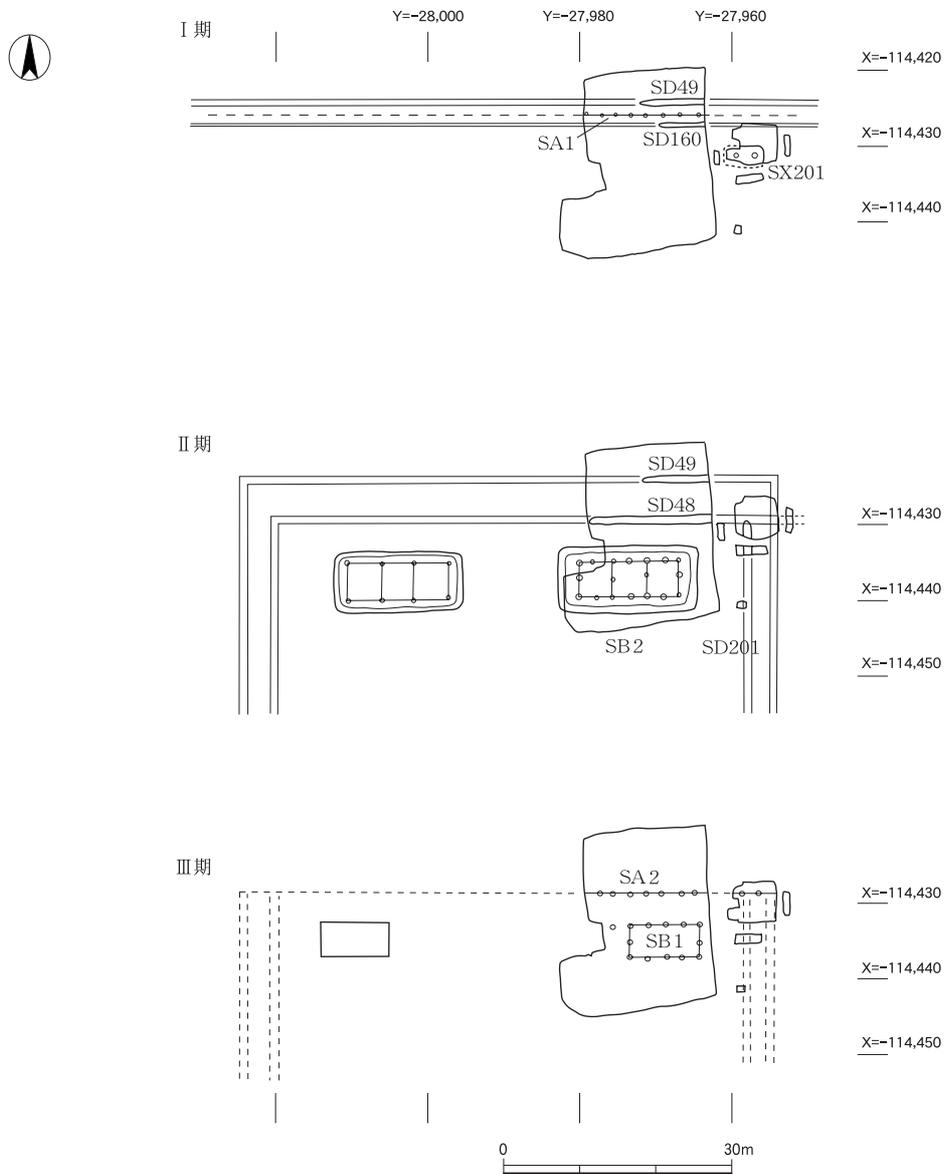


図9 寺域外郭施設の変遷

認識を持っている。

掘立柱建物群...SB3～SB5は多少の出入りがあるものの、西側の柱筋は大まかには柱筋が通っており、建物の配置にある程度の規格性が認められるようである。時期も平安後期の土器が出土する柱穴があり、当該期のものと判断している。この時期で規格性を持った建物群が認められるのは、荘園関係（荘所）の遺構と推定することも可能ではないだろうか。

調査地は山陰街道と物集女街道が交差する付近であるところから、交通・物資の輸送などの利便性が高いために設置されたのではないかと推察される。奈良時代から平安時代前期のいわゆる初期荘園遺跡では石川県・横江遺跡やじょうべのま遺跡がよく知られており、類似する構造を示している。荘園絵図でも『道守荘絵図』にも同様の建物が描かれている⁽¹²⁾。そのため遺構の時期が異なるもの、荘園関係遺跡の提示を行って見たわけである。ただし具体的な所領関係などについては不明である。

井戸...3基検出されているうち、SE109は調査時でも湧水が激しく、底まで完掘することができなかった。これらの井戸に伴う建物遺構の検出が無かったため、生活用水取得の為というより、むしろ農作物灌漑に供するためのものであったかと考えられる。

小溝群...両調査地ともに幅20cm内外の細い溝を検出している。これは耕作に伴う溝で、近世以降に掘り下げられたものである。先の井戸もそのために穿たれたのであろう。

流路SD212・216・217...埋土を検討すると、いわゆる鉄砲水が流れた様子で、この流路によって榎原廃寺を中心とする景観は一変したものと考えられる。

7 伽藍・寺域の復元

榎原廃寺は第1次調査の結果から、「四天王寺式」の伽藍配置が想定されていた。それは現在でも全く否定されるべき見解ではないが、若干の疑問が介在する。つまり講堂の存在が確認出来なかったこともあるが、基壇をもつ建物が仮に（小）金堂であるとするなら平面配置はバランスがとれない、見た目でも伽藍内の空間が大きすぎるといった点が指摘できる。そこで再度寺域および伽藍の復元を試みてみたい。

瓦積基壇（百済）を持つ八角形の塔（高句麗）出土瓦、山背地方にお

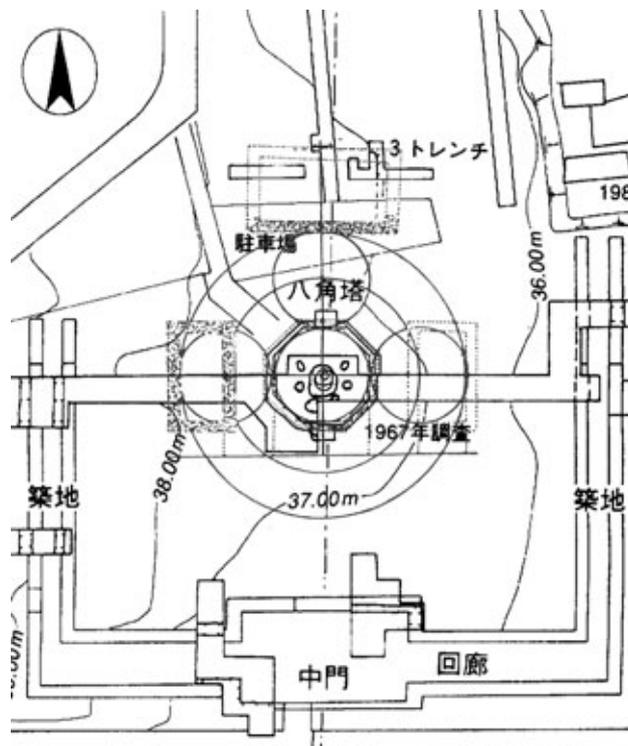


図10 榎原廃寺と土城里廃寺(註13文献より引用・合成)1:1,000

ける渡来系氏族の雄である秦氏のテリトリーといった点を兼ね併せて考えると、朝鮮半島の寺院の影響が色濃い。なかでも八角塔を中心とする伽藍は、高句麗通有のものであろうと考えられている。そして高句麗寺院の伽藍配置の基本は、一塔三金堂式であるという理解が有効であるとされる⁽¹³⁾。檜原廃寺出土の軒丸瓦も高句麗の系譜を引くものであるところから、そう考えてもよいであろう。多くはないが高句麗の寺院は戦前の調査を含めて、平壤およびその周辺で発見・報告されている。さらにまた第4次調査で検出した建物基壇は予想以上に塔に近接しており、またその規模はすこぶる小さい建物であることが判明した。

こうした理解をもとに、また一例として実数値が公表されている高句麗の土城里廃寺⁽¹⁴⁾と檜原廃寺のデータを比較したとき、八角塔の一边はそれぞれ7.9m : 5.07m、直径は18.2m : 12.27mと約3 : 2の規模であることが判明した。そこで八角塔を同じ大きさに調整して塔を中心として重ね合わせたとき、この基壇程度の建物SB205と土城里廃寺の中金堂とがほぼ重なり合うことが判明した（図10）。同時に東西の金堂も、第1次調査で検出された築地の間に都合よく収まることが分かった。同様に清岩里廃寺⁽¹⁵⁾でも塔（一边9.5m）の規模の比率は約2 : 1であることも確認できた。塔と金堂との距離にバラツキがあっても、建物に関しては同程度の比率規模と見なすこと

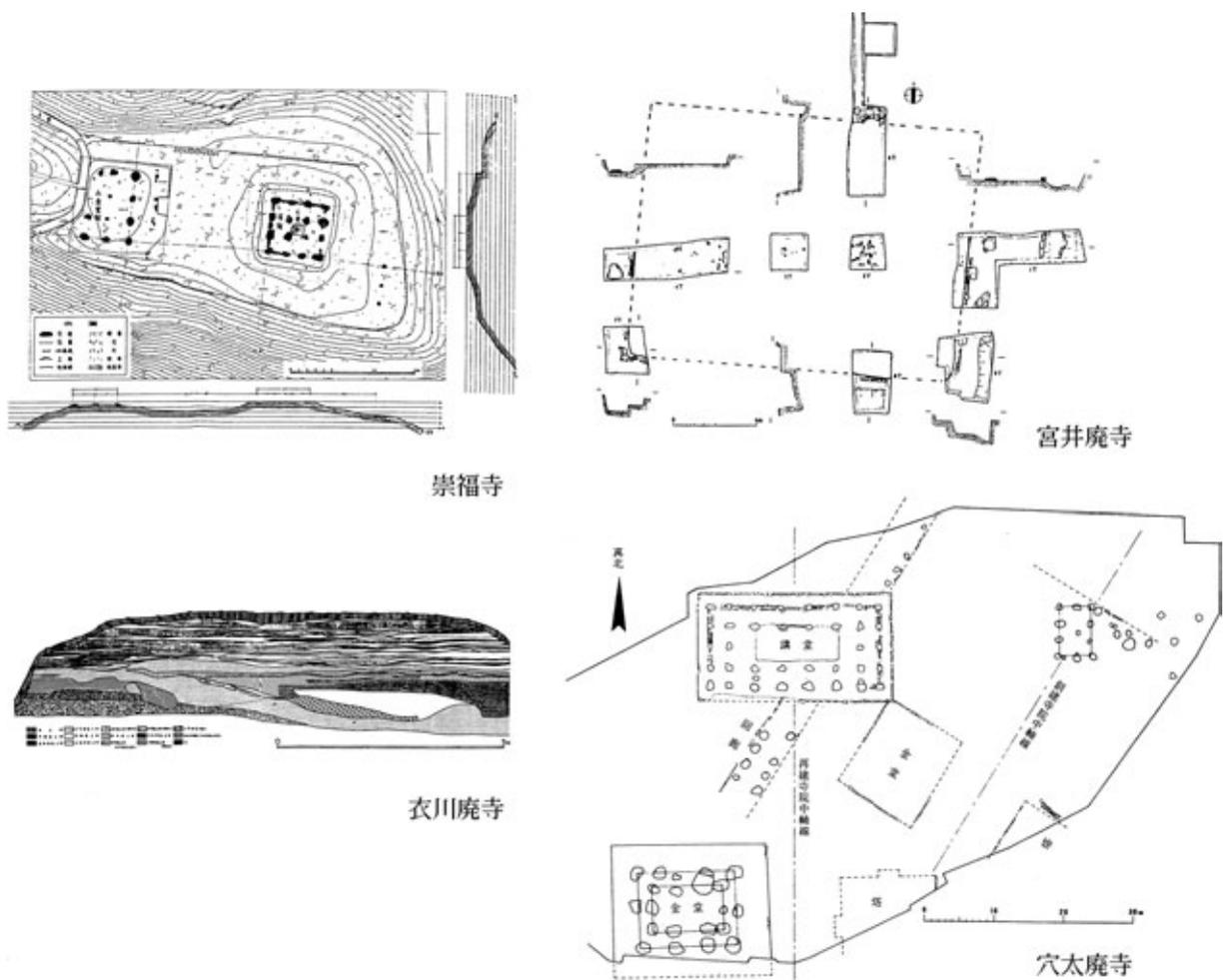


図11 近江古代寺院の(小)金堂（註16文献より転載）

が出来るかと思われる。翻って近江の衣川廃寺（金堂；約15×12m）、崇福寺（小金堂；11.4×11.4m）、宮井廃寺（金堂；16.72×11.68m）、穴太廃寺（西金堂[創建]；14.3×12.3m）などでも小規模な金堂の存在が報告されている（図11）⁽¹⁶⁾。これらの寺院も渡来系氏族との関係が指摘されているところである。

つまり檜原廃寺の塔と基壇建物の規模と位置関係からも、高句麗の寺院との関連性がうかがえるのである。金堂基壇の断面も、衣川廃寺の基壇実測図を参考にすると上半部は版築であるが、下半部は土塊を入れて固めただけの様相を呈しており、基壇の築造法も檜原廃寺と類似しているのではないかと思われる。

しかしながら、第1次調査では東西には建物の痕跡は認められなかったが、東西にも建物（金堂か）を作るだけの余地は有ったことを指摘しておきたい。しかし最初から作る計画がなかったのか、あるいは何らかの理由で造ることが出来なかったのについては断定しがたい。第4次調査結果では講堂の検出がないため、具体的に伽藍配置などの復元については無理が生じるが、一応当初は高句麗の寺院をモデルとして一塔三金堂の型式を目指していたが、結果的に達成することができなかったと解釈してみたい。

講堂については、第3・4次調査で検出出来なかった。しかし掘建柱建物であったなら、調査トレンチの幅が狭かったために柱間を掘っていた可能性がある。そのため、本当に無かったかどうかは結論付けられない。

寺域については、第3次調査で検出している外郭遺構群から、時期によって多少の移動はあるが北限は確定できる。東・西限は奈良時代末期から平安時代初期という条件が付くが、第1・3次調査で検出している遺構群の検証で確定できるかと思う。すなわち第1次調査で報告しているように東西幅は63.7mと確定できる。ただし第1期については、幢竿支柱遺構が東築地遺構とほぼ重なっているため、本来の寺域はもっと広がっていたのは間違いないと考えられる。しかし、現時点では遺構によって設定することはできない。

南限については、第3次調査で当初はSD48とSD49の距離と南回廊の幅が似かよった数値を示しているため北回廊と理解した。第1次調査ではトレンチ調査による部分的な遺構検出であるために確かなことは言えないが、第3次調査と同様に幾つかの東西溝・柱列が組み合わさっていたのではないかという可能性が指摘できる。もしこの考え方が正しいとするなら、北限の遺構群から約115m余り南方の「中門」遺構については再考の余地があるかと思われる。

小結

小稿では「はじめに」で記したように、修正すべき点は正したつもりでいる。そして新たに得られたデータや遺物を、この場で公表することも出来たかと思う。

しかし、当初の構想では考えていたのであるが、当廃寺で用いていた「ものさし」や寺域の「振れ」、それに伴って「中軸線」を確定することは出来なかった。今後の課題となった。

（追記）

第4次調査の第2トレンチで発見したSB205の遺構は、文化庁の指導により瓦に覆われた状態で遺構の精査・実測を行い、瓦の堆積は除去せずに埋め戻した。

小稿は当初は遺構のみならず、遺物についても報告する予定であった。しかし諸般の事情により、（上）遺構編、（下）遺物編に分冊せざるを得なくなった。そのため、論考で若干の無理が生じているかと思う点もあるが、次号と併せて完結させたいと考えている。

註

- （1）『京都市内遺跡発掘調査概報』平成9年度 京都市文化市民局 1998
- （2）『京都市遺跡地図』京都市文化市民局 2003
- （3）佐藤興治「檜原廃寺発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1968
杉山信三・佐藤興治「檜原廃寺跡の発掘調査」『仏教藝術』毎日新聞社 1968
- （4）平尾政幸『檜原廃寺発掘調査概報』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター・（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981
- （5）『京都市内遺跡試掘調査概報』平成8年度 京都市文化市民局 1997
- （6）長戸満男「檜原廃寺・檜原遺跡・檜原廃寺瓦窯跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991
- （7）『京都市内遺跡試掘調査概報』平成7年度 京都市文化市民局 1996
- （8）『額田寺班田古図』には伽藍内に鳥居が描かれている
- （9）a 『観音寺跡（信太寺跡）発掘調査現地説明会資料』大阪府教育委員会 1977
b 『第42回埋蔵文化財研究集会 古代寺院の出現とその背景』第2分冊発表要旨・資料（西日本編）
香芝市二上山博物館・埋蔵文化財研究会 1997
- （10）田中琢・佐原真編『日本考古学事典』三省堂 2002
- （11）『京都府遺跡調査報告書』第15冊上人ヶ平遺跡 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991
- （12）『考古学ジャーナル』241 ニュー・サイエンス社 1985
- （13）千田剛道「〔高句麗〕寺院跡の発掘」『仏教藝術』207号 毎日新聞社 1993
- （14）（13）及び『朝鮮考古学研究』1987-4(原文はハングル)
- （15）（13）及び『昭和十三年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究会 1940
- （16）小笠原好彦・田中勝弘・西田弘・林博通『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 1989

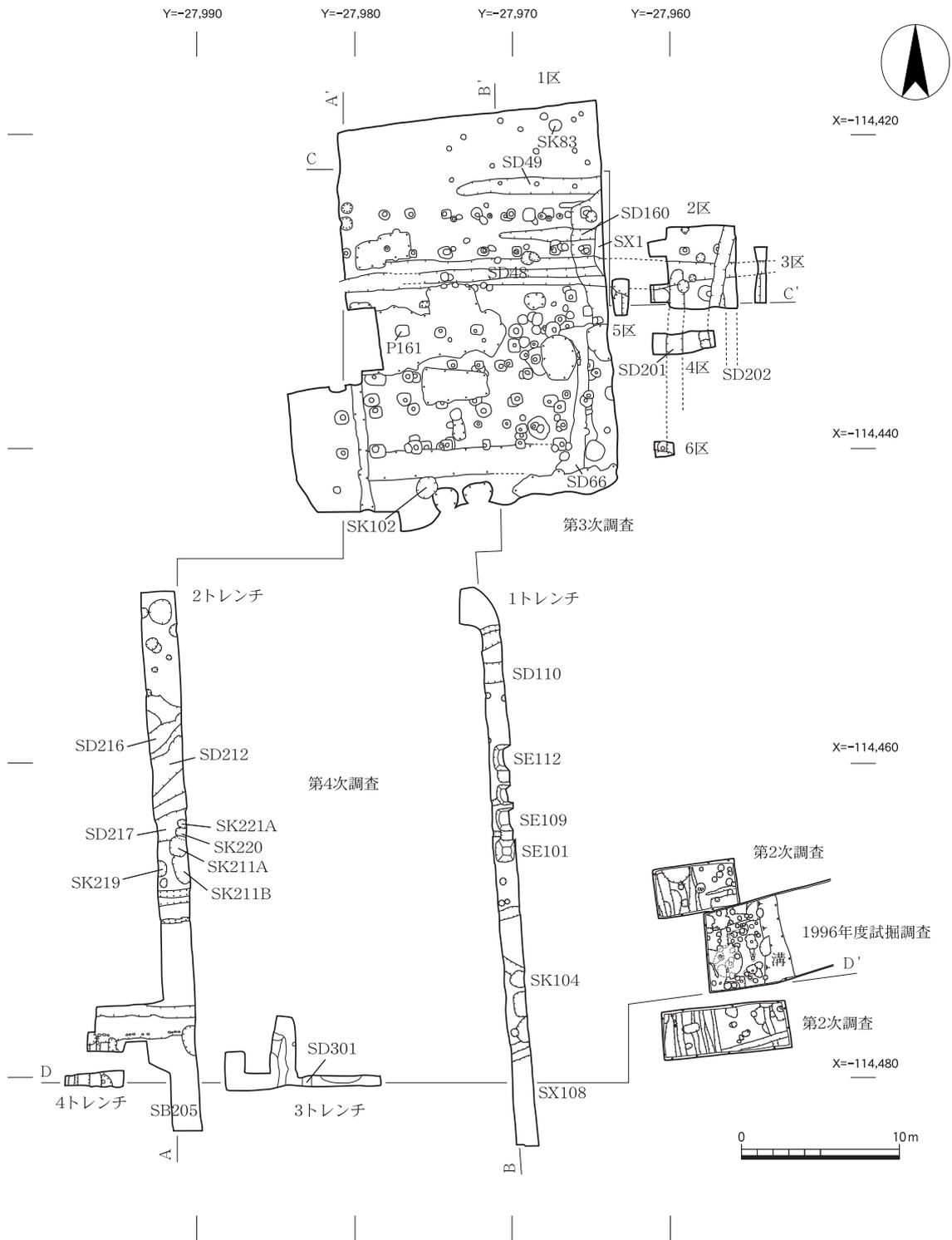


図12 第2次～4次調査遺構実測図

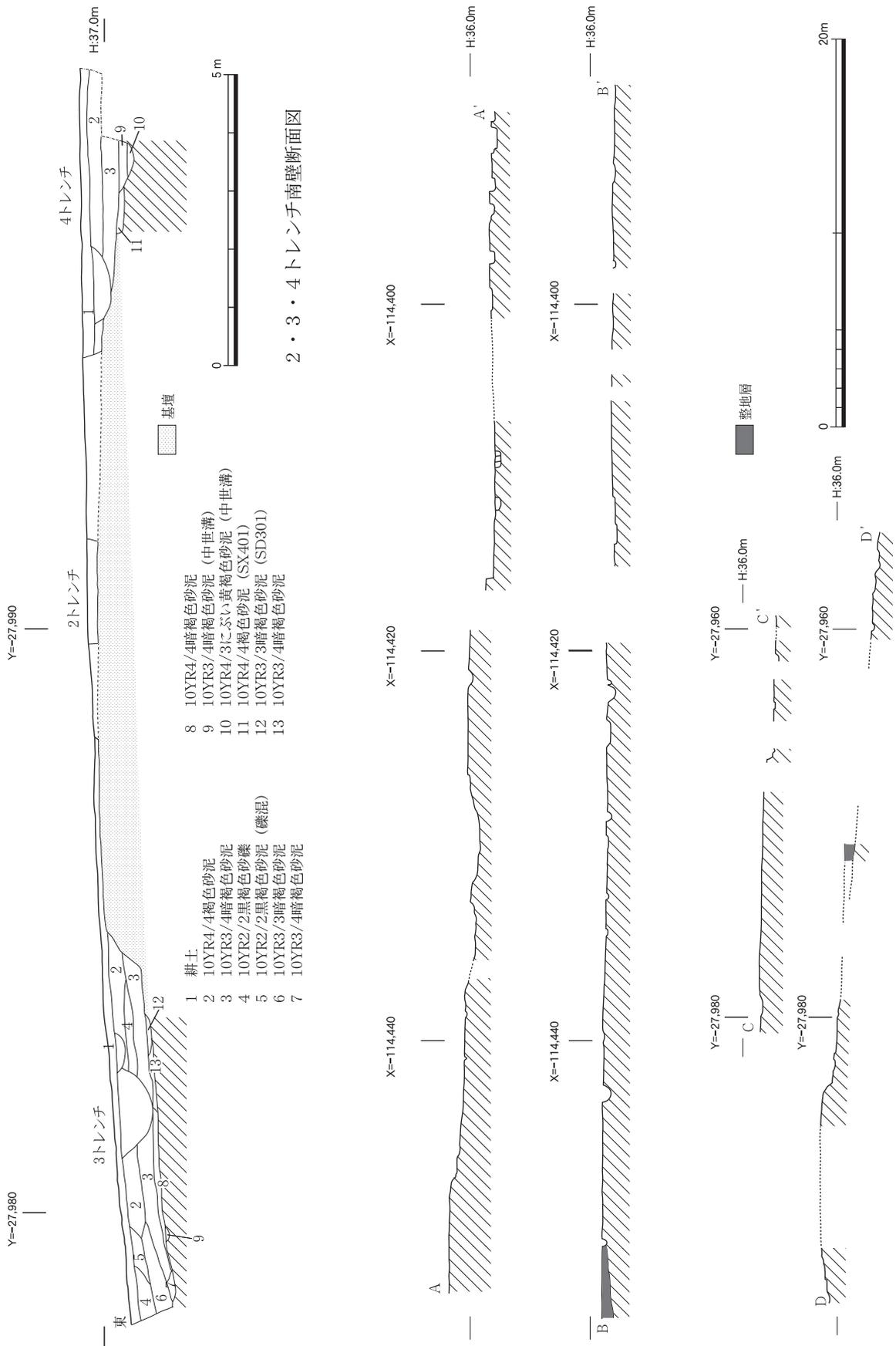


図13 第3次・4次調査区断面図

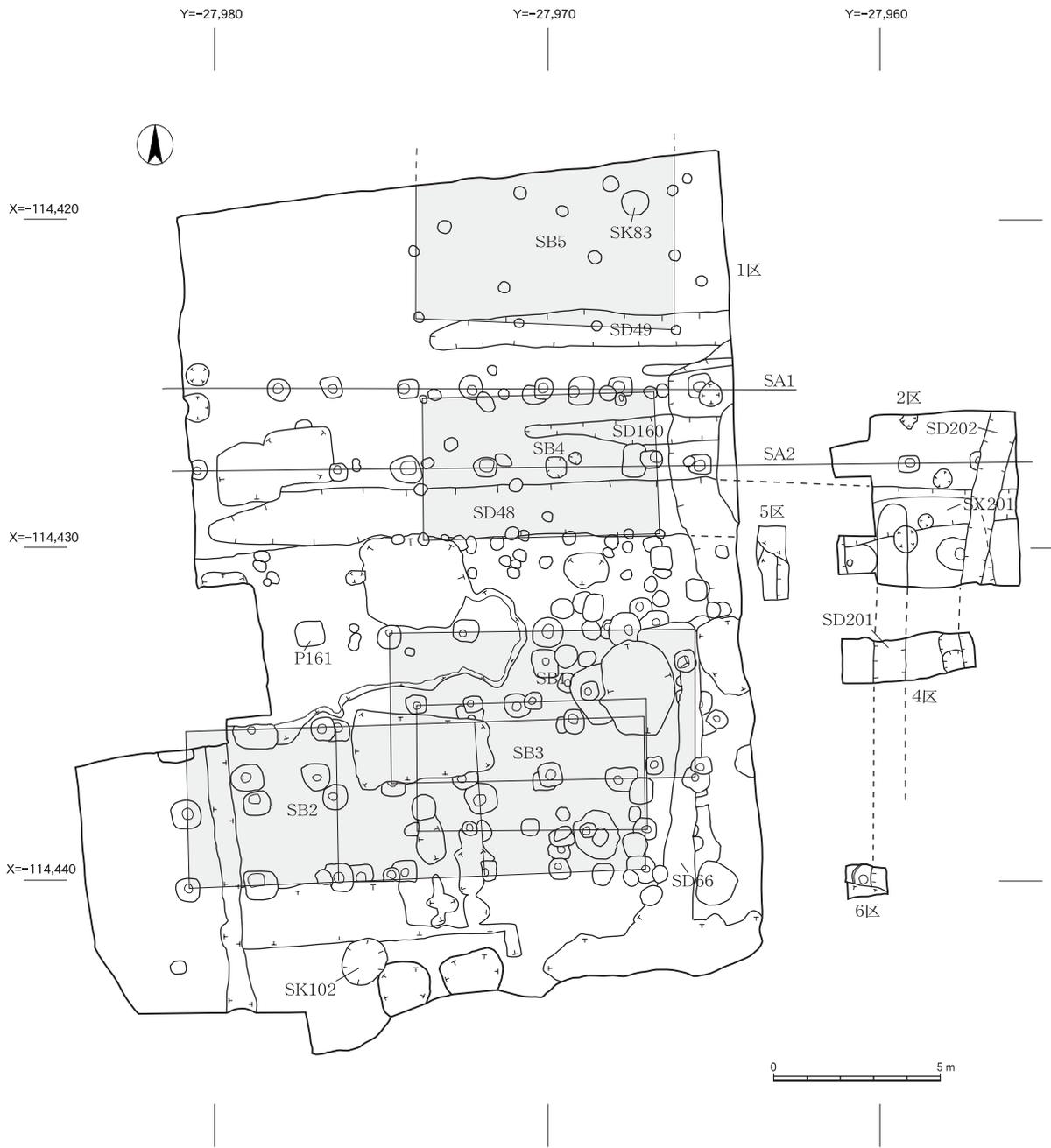


図14 第3次調査遺構実測図

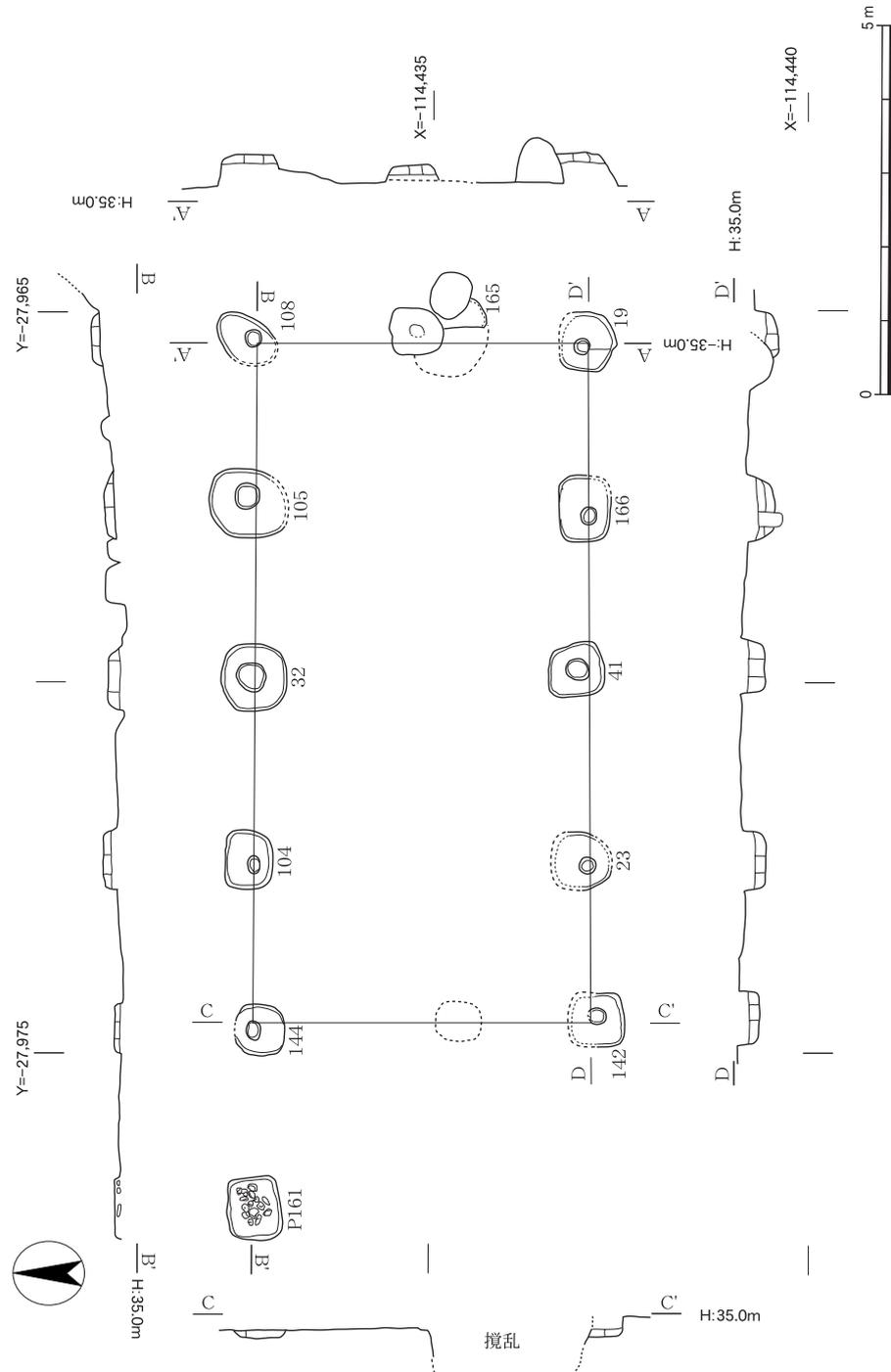


図15 SB1実測図

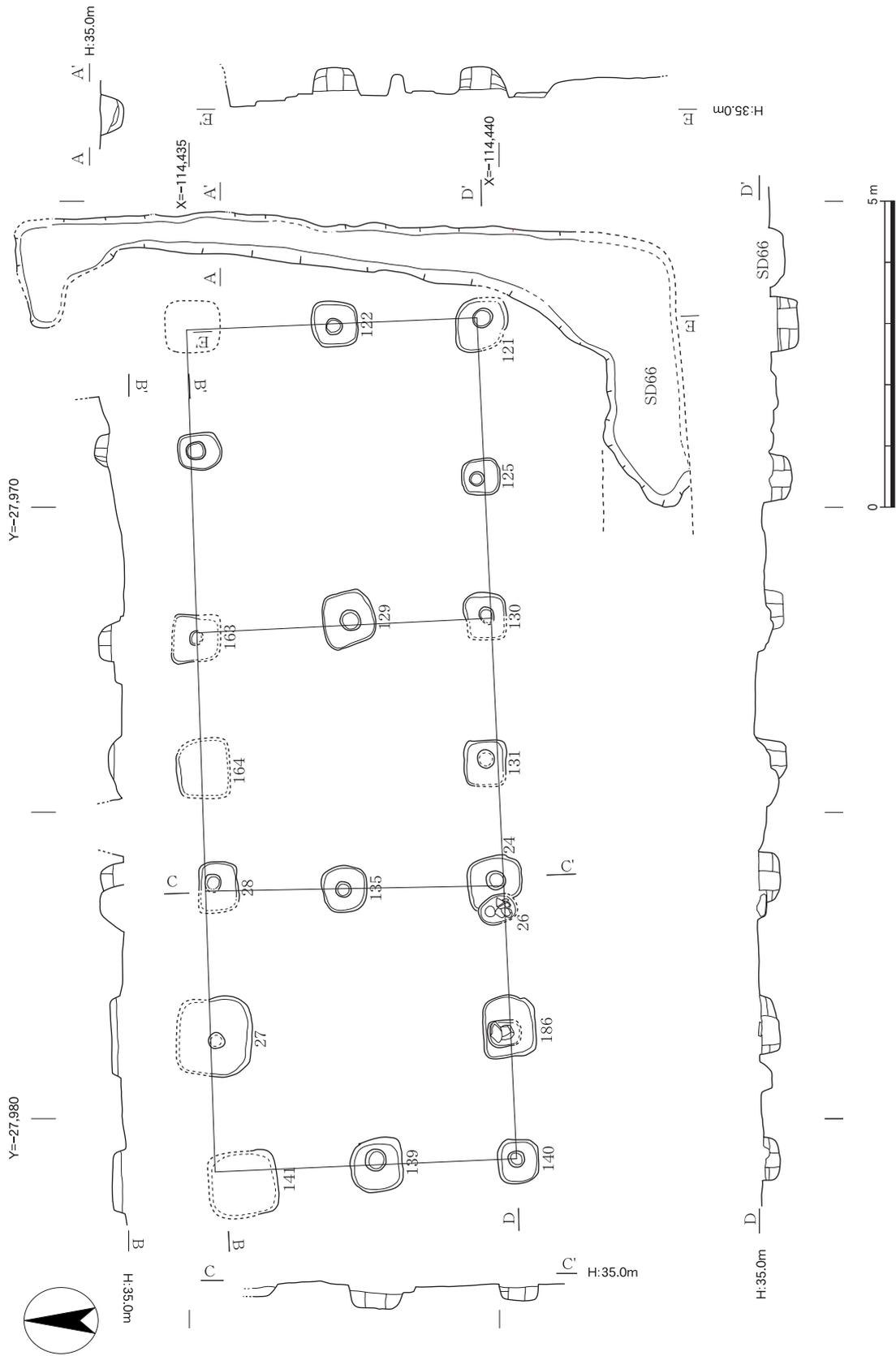


图16 SB2・SD66实测图

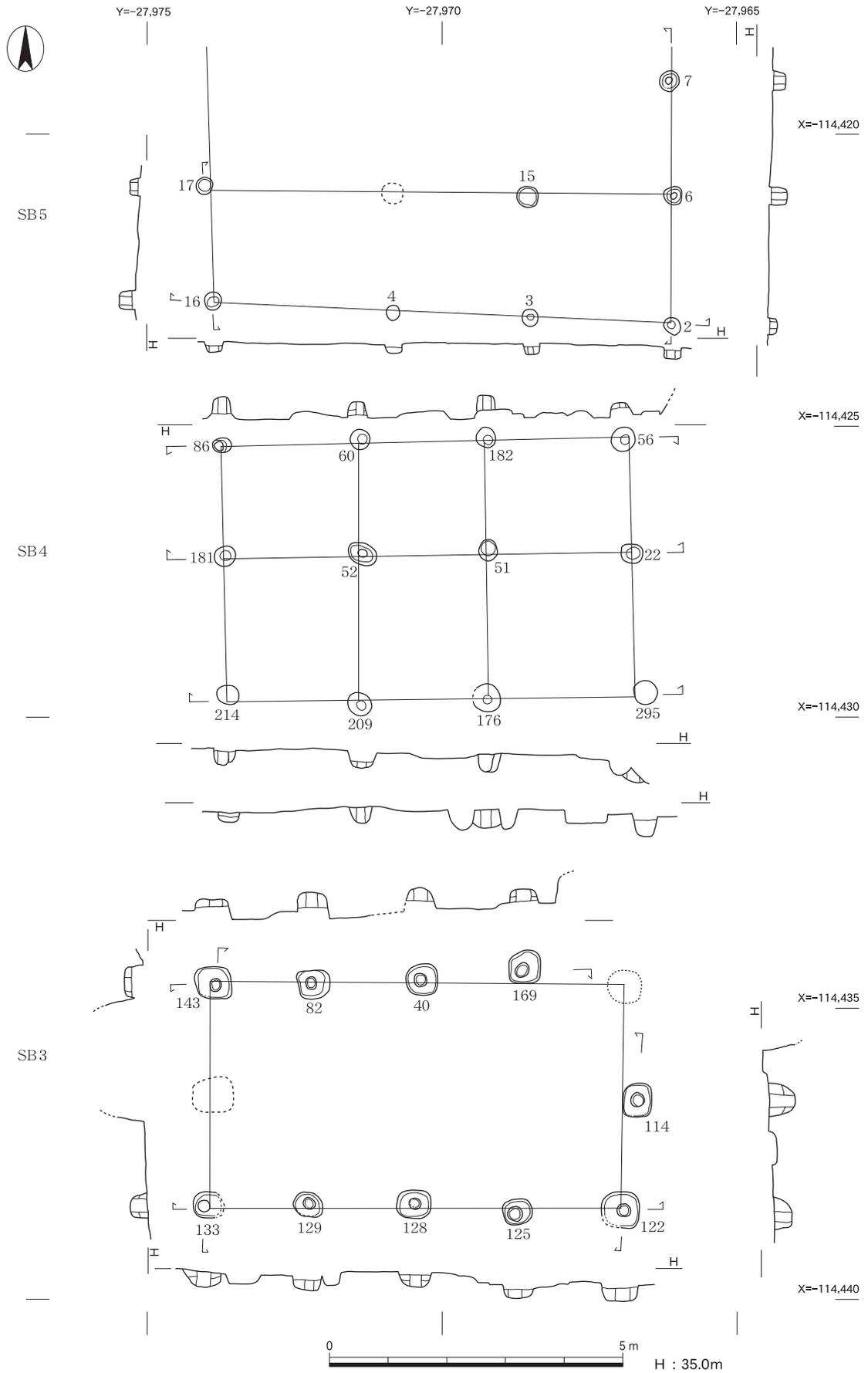


図17 SB3・4・5実測図

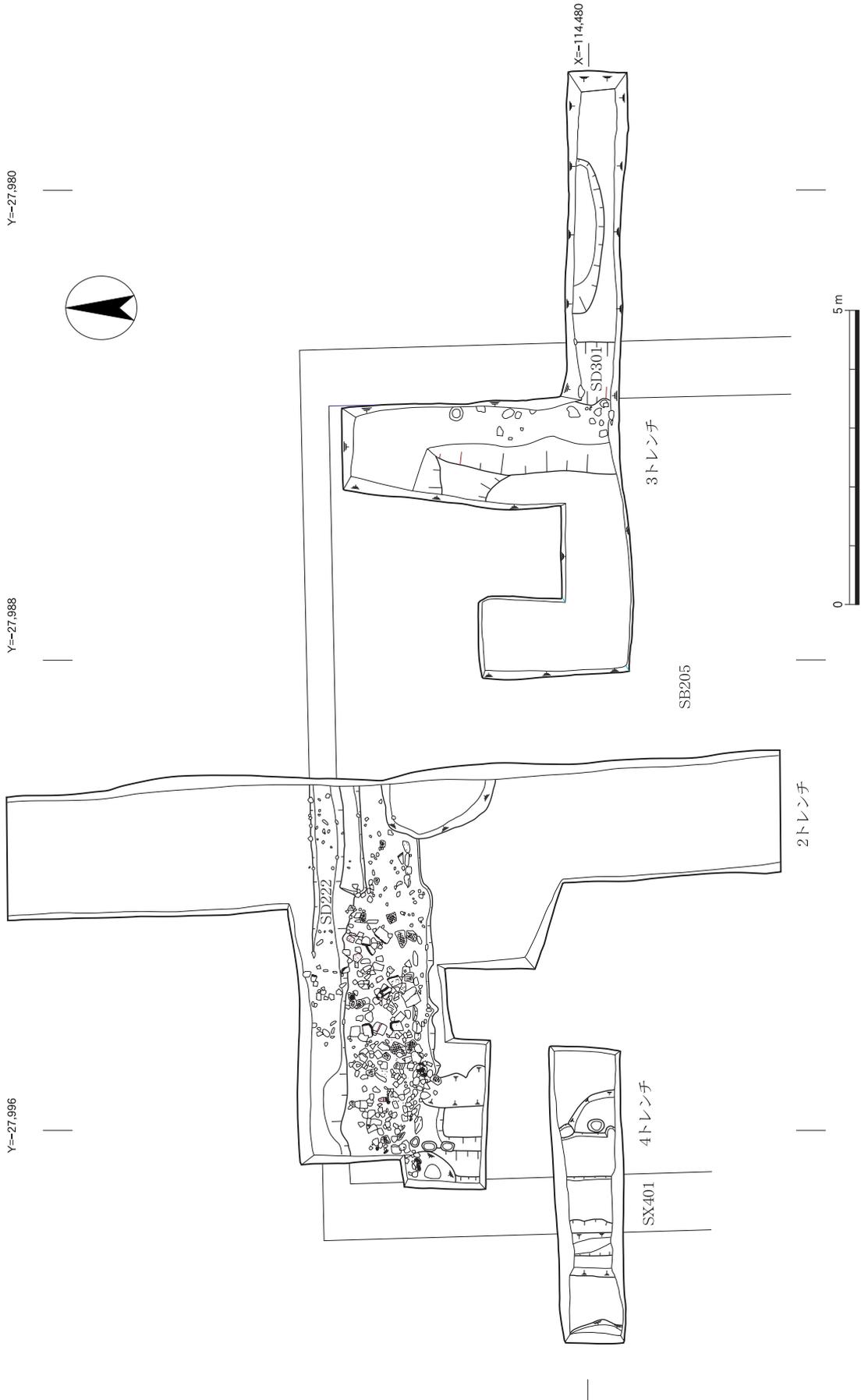


図18 SB205実測図

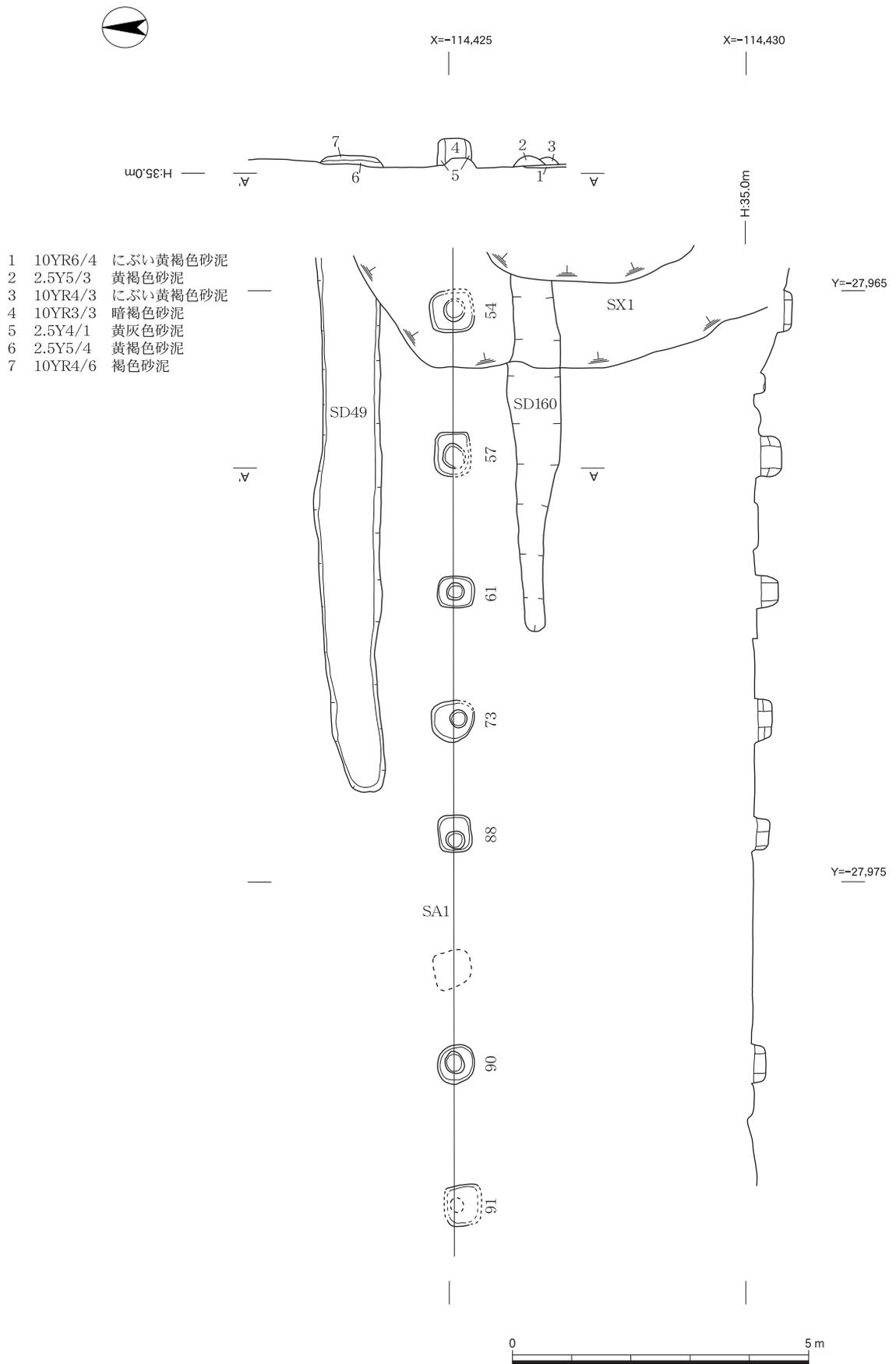


図19 SA1・SD49・SD160実測図

X=-114,420

X=-114,430



Y=-27,960

Y=-27,970

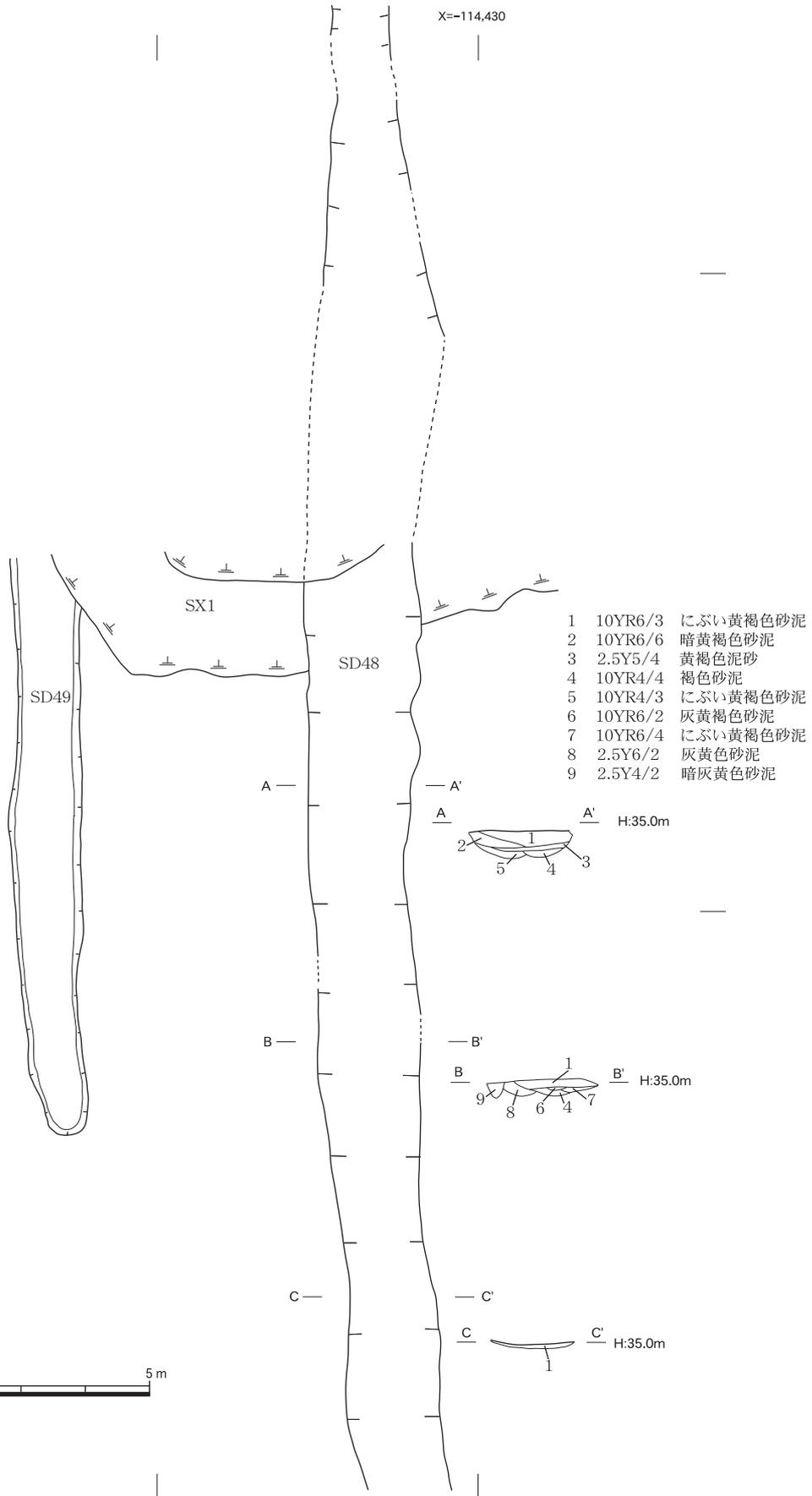


図20 SD48・SD49実測図

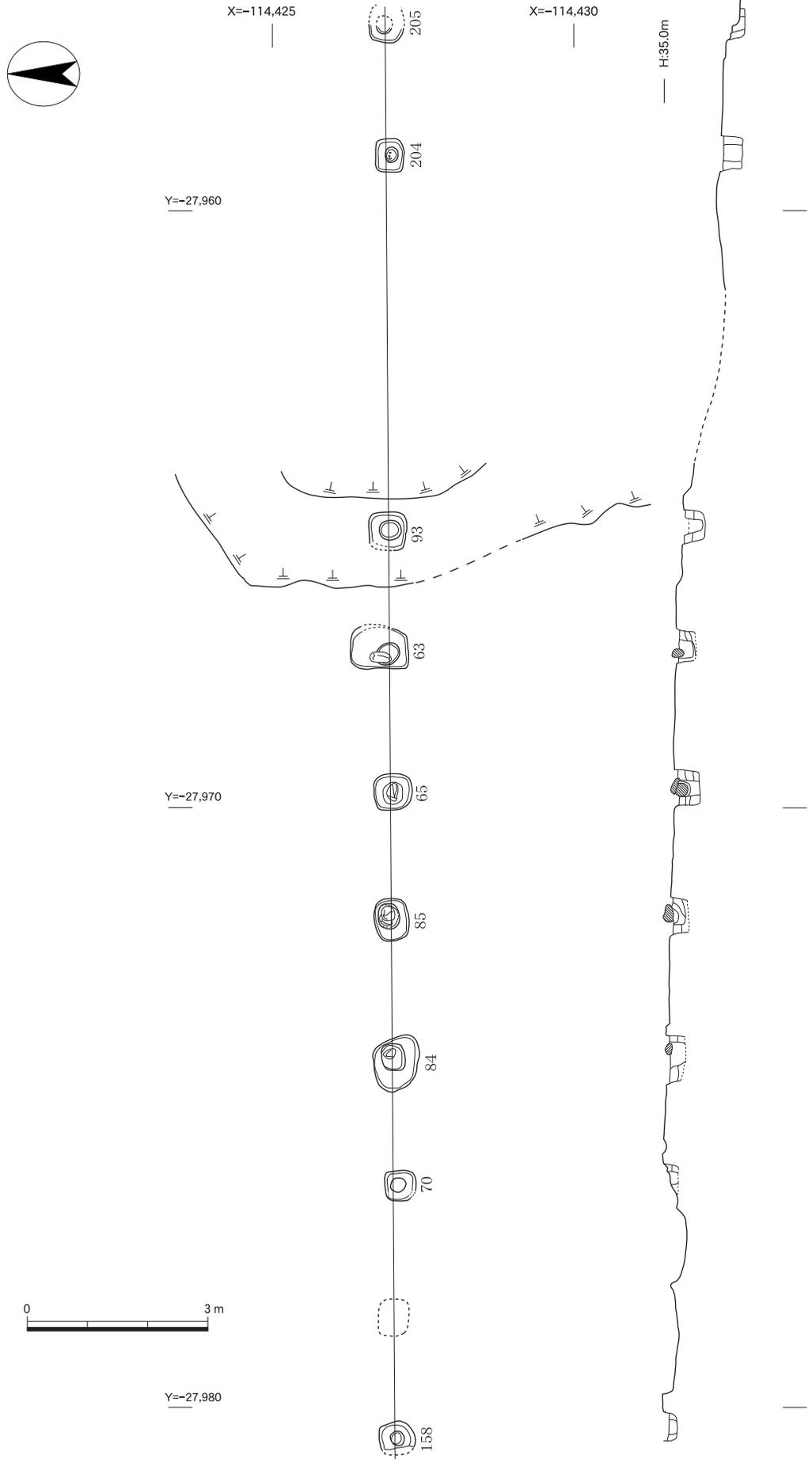


図21 SA2実測図



写真1 檜原廃寺周辺



写真2 第3次調査 1区全景(西から)



写真3 第3次調査 1区北半（西から）



写真4 SA1・2、SD48・49・160（西から）



写真5 SD48検出状況（東から）



写真6 第3次調査 1区南半・柱穴群（西から）



写真7 Pit26（南から）



写真8 SB2（東から）



写真9 第3次調査 2区全景（北から）



写真10 SX201検出状況（南東から）



写真11 SX201断割（北東から）



写真12 第4次調査 第2トレンチ全景（北東から）



写真13 SB205（東から）



写真14 SB205（北から）



写真15 第4次調査 第1トレンチ全景（北から）



写真16 SD110（北から）



写真17 SK104（北西から）



写真18 第4次調査 第2トレンチ全景（北から）



写真19 SK220（西から）



写真20 中世流路（東から）